

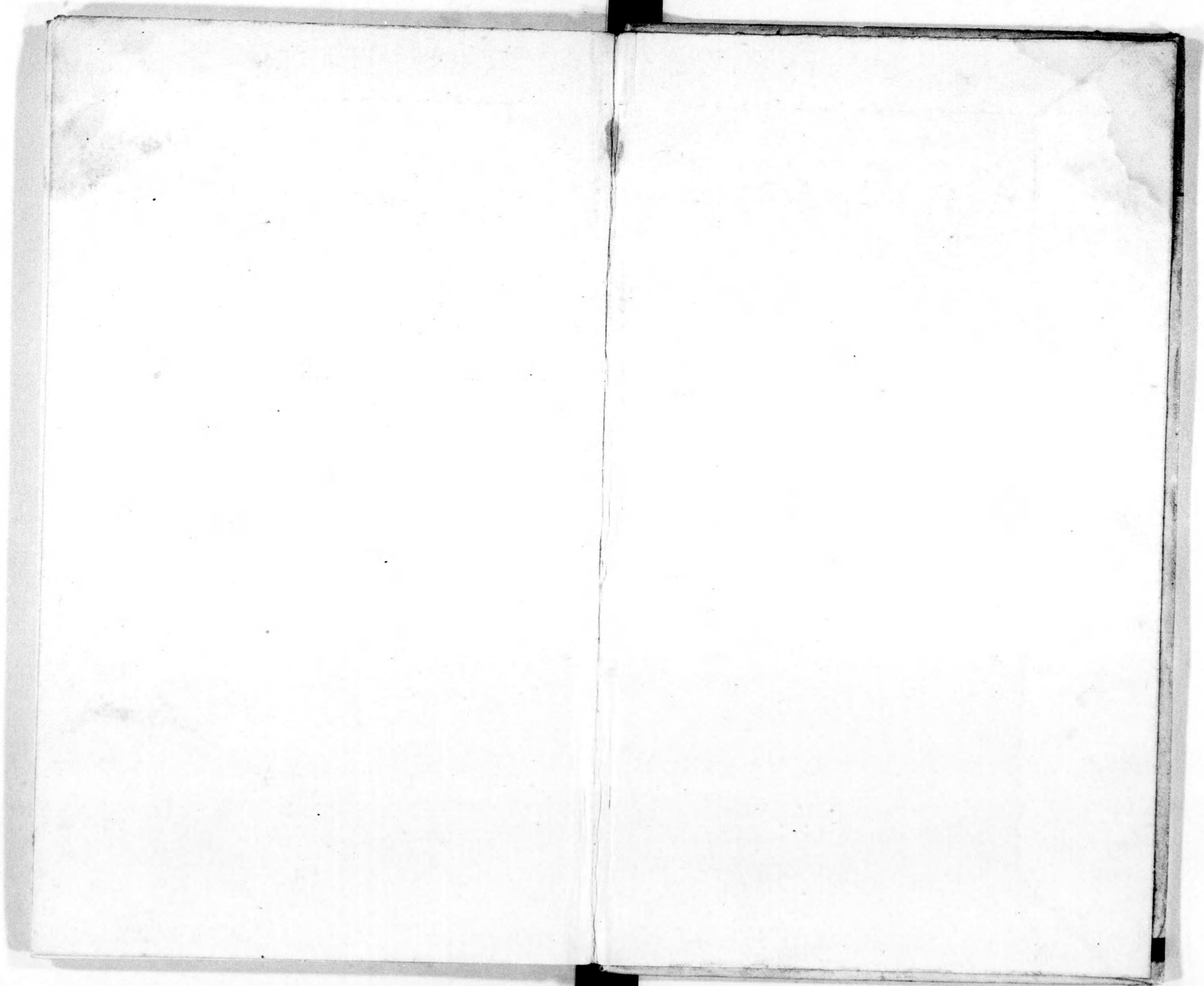


人の命運



始





特101
763.

近世脚本文庫

第五卷

運命の人の

カヨシドアナアバ

風熱

クルベドンリトス.トスグウア

楠山正雄譯

現代社

大正
2. 3. 25
内交

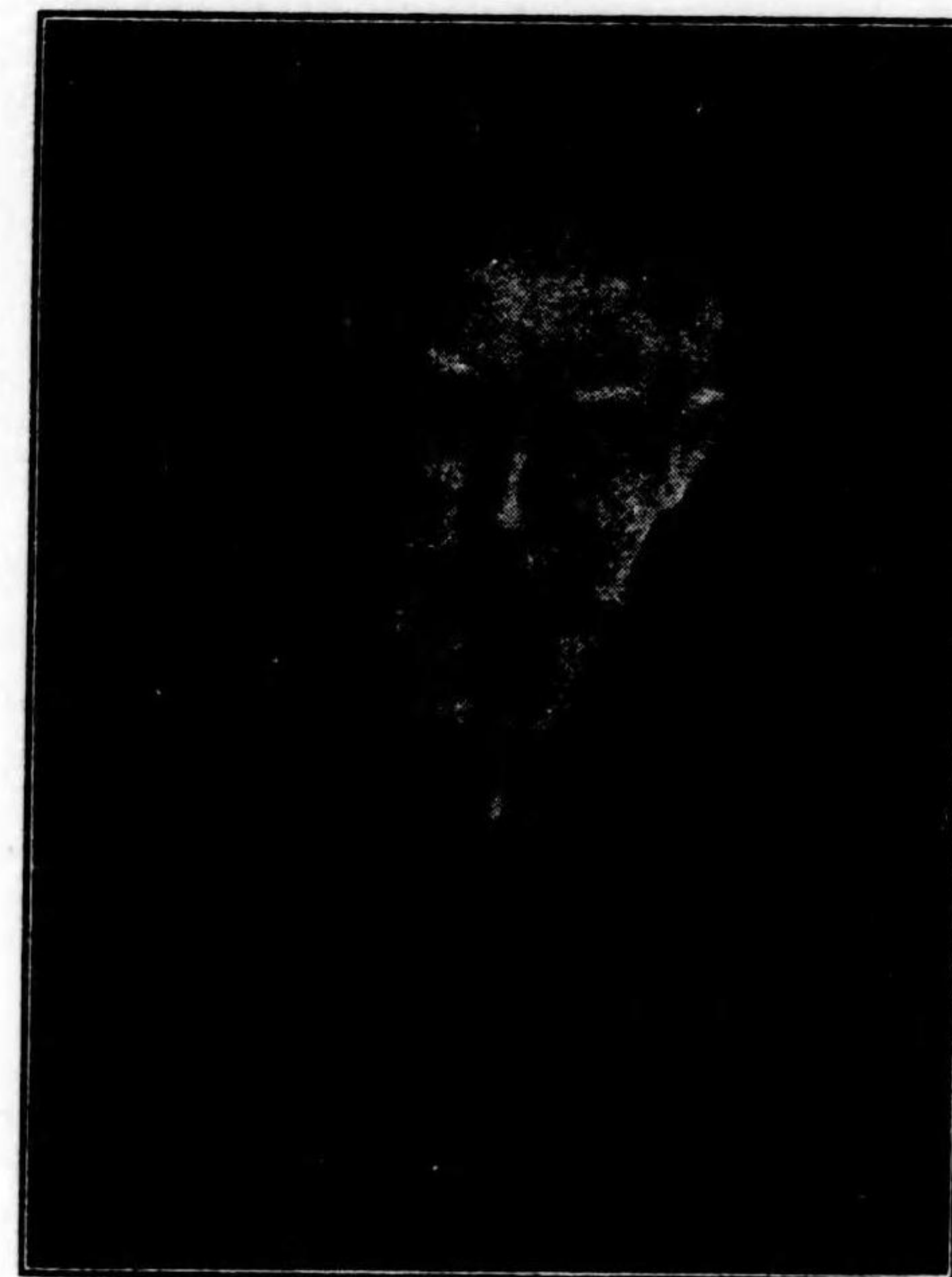
**THE MAN OF
DESTINY**

BY
G. B. SHAW

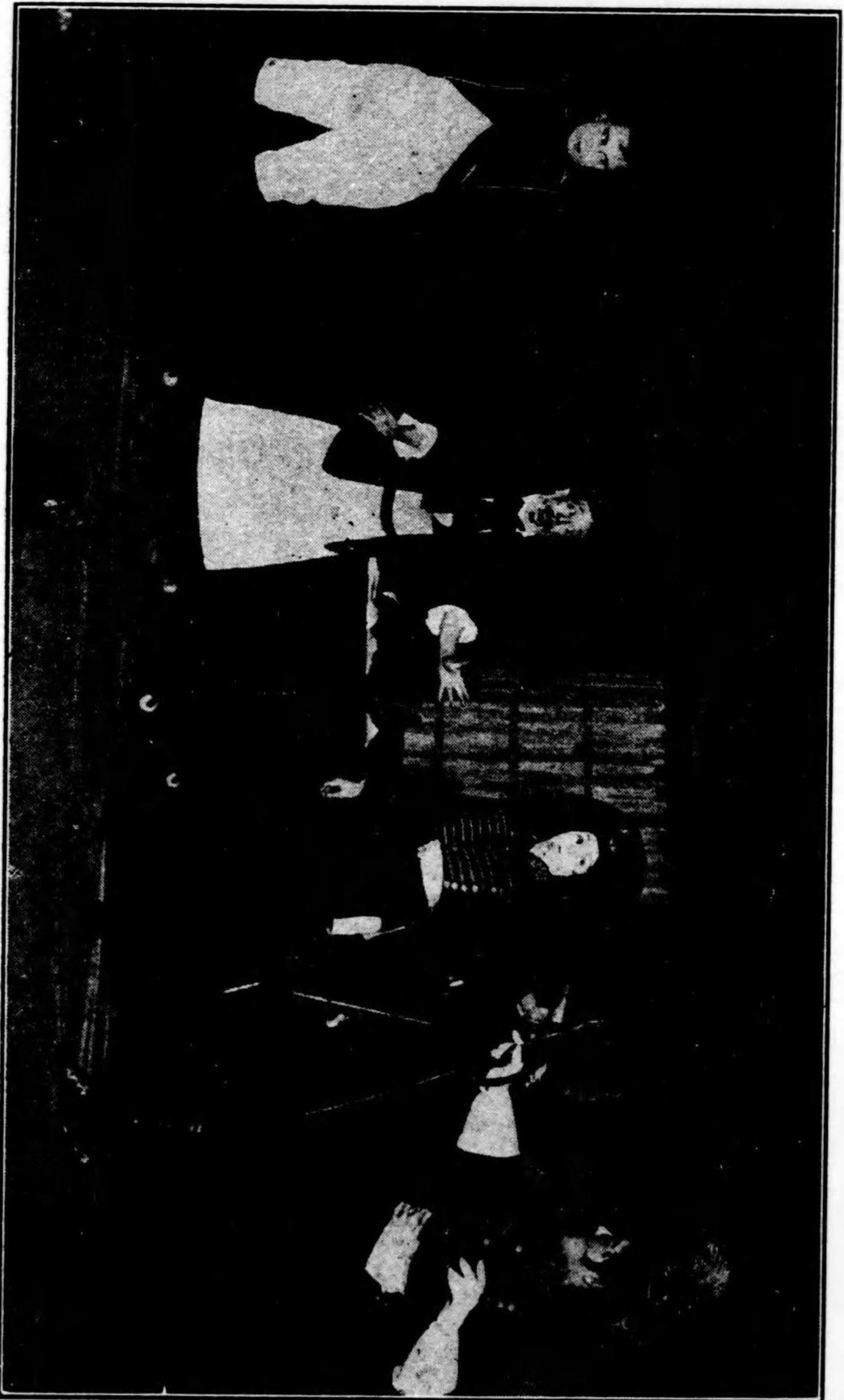
AND

SAMUM

BY
A. STRINDBERG



G. B. SHAW



文藝協會試演の命運の人



熱風の女王主人ラスビに扮せ
スリドンベルの三度目の夫人
女優ハエリツボツセ

近代脚本叢書發刊について

兩三年前から、文壇の中心興味は、漸く小説から別の方面に移つてまゐりました。新しい劇、面白い脚本、此聲は現下の文壇の凄まじい絶叫であります。少くとも新しい文學を語り、進んだ美術を味はんとするものは、綜合藝術の粹である劇を知らなければならぬことゝなりました。現代の此要求に應ぜんが爲に生れた近代脚本叢書は、泰西名家の手に成つて巧評噴々たり、文壇知名の翻譯家に

よりて移植せられた傑作並に我劇作家の筆に成つた佳篇を續刊し、近代人の渴を醫せんとするウオトカであります。劇界革新の曙光、新文壇の寵兒であります。蓋し此叢書の盛にもて囃されるも否とは、我新興文壇の趨勢の果して如何なるかを示して餘あるものと信じて居ります。敢て一讀を新しき近代人におすゝめ致します。

大正二年二月

現代社主人敬白

小 引

昨年の夏の「運命の人」が文藝協會の私演劇場に上場せられたときには、大抵の観客は分かつたやうで分かなひ、痒つたい顔をして歸つた。中には始めつから観客の感情を妙に持ち上げておいて、終ひまで到頭持ち上げつばなしで、ほんと突き放してしまふところが、黄表紙式の茶氣があつて嬉しいといふやうなことを言つて納まつてゐた人もあつた。なるほどあの時は本より翻譯も拙いし、役者の解釋にも徹底しないことの方が多かつたのは事實であるが、「運命の人」といふ戯曲はほんたうはそんなに譯の分からぬシバ井でもないし、作者シヨオといふ人もとんだ洒落つ氣のある黄表紙作者と早合點されても困るのである。それといふのがこの作はすゑぶん始めつから終ひまで、観客の感情を高度にまで釣つ

て置き乍ら普通の劇作者のするやうにおしまひへ行つて、きちん
とくくりを付けて幕にしない。落語で言へば下げがない。木な
しに幕どころか、摩訶不思議な感じを観客の胸にそつたまま、木
も打たず、幕も開けつ放して役者が引つ込んでしまふ。そこがシ
バ井の幕切には役者が見得を切るものと心得た観客の荒膽をほ
んの少し許り挫いたのである。人並よりは少し旋毛の曲つた作
者シヨオは、並の作者のやる様な辻褄の上手に合つたお話を作ら
へるやうな面倒臭いことはしない、ただありのままの實世相、この
頃のはやり言葉で言へば、生活の断片をそのままにさらけ出して
見せただけである。もう一つはやり言葉を借りると、刹那の氣分
の燃焼を見せただけである。卓越した人間の靈魂の決闘を見せた
だけである。さういふ意味でこの作者は徹底的な自然主義者だ

と言つてもいい。何故と言ふに、作者は大ナポレオンといふ近
世ヨオロッパ史上に最も偉大な偶像的英雄、進化論と物質科學が
一切の美しい幻影を消した近代文明史上に古代の神秘的な半神
的英雄の傳説を復活した大征服者を捉へて來て、遠慮會釋なく一
個の天才ある平凡な人間として鋭い冷やかなメスを揮つて、赤裸
裸な解剖を試みた。勿論超人間的な英雄として崇拜するのは馬
鹿々々しいが、強いて詰まらぬ人間にして百年の後に侮辱を加へ
ようといふのではない、ただ權兵衛や太郎作を描くと同一の態度
で、「英雄」ナポレオンを描いただけに過ぎないのである。
だがシヨオといふ人は自然主義者には違ひないが、味も香もな
い平面描寫一點張の日本の自然主義作家とは少し違つた自然主
義者である。シヨオ自身は詩を排し、空想を排し、ロオマンズを排

し、センチメンタリズムを排し、自分は馬鹿々々しい幻想の世界に住んでゐる人間ではないと言つて威張つてゐるが、生れつきの身についた匂ひといはうか、肌合といはうか、テムペラメント——氣稟といはうか、夢みごこちな懐しいロオマンズの味ひは、どうしてもそのハンの尖に迷つて来る。シヨオが態度に於いて自然主義者で、しかも氣分に於いて自然主義以後の新ロオマン派と相契合する所以である。シヨオといふ人をただ粗つぽい情味のない聲てカラカラ課り立てる男だとはかり言つてはならない。彼の作をフランス流のただ騒々しい悪るふざけの仁輪加だと思つてはならないのである。

しかし日本の劇場では、まだシヨオのロマンチストとしての面目が一向紹介されない。そして英國の茶劇作者といふ尊稱を

貰つてゐる。

「運命の人」は言ふまでもなくナポオレオンを描いたものである。それもまだ二十六歳の青年時代、ルグロオの肖像畫に詩人風に髪を長く垂らした美しい士官として描かれてゐる時代、初めてアルプス越をやつて、オオストリア人の膽を挫き、イタリヤ全土を統一して故國に凱旋し、終身の督政官としてフランス統一の第一歩を固めた時代、その前後のナポオレオンを描いたものである。シヨオがこの作に描いたところに依ると、ナポオレオンといふ男は、別に神人でもなんでもない、やはり人間並弱點も名聞氣も澤山ある男である。無暗に戦争に勝つやうだが、よく調べて見ると、ほんの偶然に微妙な人心の機微のはたらきでその時々運が向いて來た

だけであつて、必らずしもナポオレオンその人の神界鬼謀が百發百中したといふ譯でもないのである。英雄ナポオレオンの偉業も畢竟なんの高哲もないことである。しかしかう平面描寫式に言つてしまふと世の中がつまらなくなる。氣分に於てロマンチシストたる作者シヨオはそれ丈では満足ができない。ナポオレオンといふ男はだがやはり偉い男には違ひない、有象無象とは違つた天才——多くの大藝術家と同様、より高い藝術的氣稟を備へた男である。凡人にはなんとも思はれぬちよいとした機微を察してこれを利用する才能がある。氣力もある。とりわけ猛烈な進るやうな「生の力」に満ちてゐる。この生の力でぐいぐい推して行くところにナポオレオンが衆愚の上に超絶する強みがあるといふのである。

ナポオレオンが男姿に化けてナポオレオンの機微を探りに來た敵方の間諜の女と、秘密書類を争ふ一段は、秀でた靈智の男女が、各あらん限りの生の力を竭して、虚に實に火花を散らして謂はゆる「性の決闘」を演ずる、この一篇の眼目である。そして結局女は生の力の極度を用ひ盡して疲れ果ててしまふが、その時にはもう大征服者ナポオレオンはすつかり女の生の力に征服せられてしまつてゐる。そして女に對して新たな戀を覺える。しかも國に残した妻のシヨセフインが督政官バラアと不義の情を通じてゐる機微の消息を秘密書類から得て、胸中には怪しく洶湧した感情のもつれもつれるのを覺える。そして高慢な征服者は暗い心を抱いて戰場に向ふのである。近世の半神的英雄ナポオレオンはやはり「運命の人」たるを免かれぬのである。

「運命の人」は一八九六年、作者四十一歳の作である。(シヨオは一八五六年、アイルランドのダブリンに生まれた。)一九〇二年の「快劇及び不快劇」(Days Pleasant and Unpleasant)の「快劇」の中に収められて出た。一幕物である。

末に附けた「熱風」は、昨年五月六十三で亡くなつたスエエアンのアウグストストリントベルクの作である。原作は彼の「十一の一幕物」の中に在る。代表的な傑作といふほどではないが、題材も形式も新しい、作者の特色の一面を語る短い乍ら鋭い緊張した作である。

大正二年二月

譯者識

運命の人 (一幕)

バナナアド シヨオ

登場人物

佛軍の司令官 ナポオレオン、ボナパアルト
部下の將校 少尉某
宿屋の亭主 ジウゼッペ・グランディ
不思議な旅の貴婦人

一七九六年五月十二日、北イタリアのタヴツァノ、ロディイよりミランへ通ずる街道での出来事。午後の太陽は靜かにロムバル

デイの野に輝いてゐるが、アルプスの峰には敬意を表して、平地の
 方は勝手にしろと言つた風である。といふのは必ずしもその近
 所の村の牛や豚共が日向ぼっこに來てうるさいからと言ふわけ
 でも、またその寺院で冷淡に扱はれたのを憤慨したわけでもな
 く、畢竟その邊にあるフランス軍とか、オオストリア軍とか言ふ
 たづらな蟲けら共の二つの群が厭で耐らぬからである。二日前
 の事である、ロデイに於いてオオストリア軍は、その狭い橋梁に
 據つてフランス軍の渡河を妨たげようと試みた。所がフランス
 軍は、ナポレオン・ボナパルトといふたつた二十七歳の、戦術も
 何んにも知らぬ小僧を大將にし、大將自身手傳つて、猛烈な砲火を
 浴せかけ、火炎の漲ざる橋梁の上を突進した。一體砲撃はこ
 の男の専門で、王政府の時代に砲兵科の教育を受けて來た。従つ

て會計方を胡麻かして旅費を捲上げたり、戦争の畫に描いてある
 やうに、大砲の音や烟で脅して、戦の景氣を付けたりなんぞして、横
 着を極める類の戦術には、十分熟達してゐるのである。それ許り
 ではない、この男は仲々獨創的な見識家で、火薬發明以來始めて、大
 砲の彈丸といふ者は、人間に當れば、その人間はきつと死ぬに極つ
 たものだといふ眞理を見つけた。この驚くべき発見に加へて、彼
 は地文學に精通し、時間と距離の計算に頗る發達した技能を持つ
 てゐる。彼はまた仕事にかけて絶倫の精力を有し、國家社會とい
 ふやうな事に人間の本性がどう働かといふ事についても、フラ
 ンス革命の間に、十分その方面の経験を積んで來た結果、酔いも甘
 いも噛み分けてゐるのである。彼は想像力に富むではゐるが、幻
 影といふものがない、創造力は豊かであるが、宗教、勤王、愛國、凡べて

さういつた世間の理想のやうなものを持たない。といつても彼にこのやうな理想を抱く能力がないのではない、反對にこんな者は皆なとつくの昔子供の時代に鵜呑にして、了つて、今日では生來鋭い戯曲的天才を持つてゐるのを幸ひ、こんなものを種に使つて、役者となり舞臺監督となつて上手な芝居を打つてゐるのである。而かも一面彼は決してお坊ちやんでは育たなかつた。貧窮、薄命、錢もないのに苦しい遺縁をして見得も張つた。怪しげな文士の眞似事として度々失敗した。年期奉公に出つたらぬ奴に侮辱もされた。職務を辱かしむる不正直な士官として譴責もされ罰則にも照らされた。既に軍隊からも危く放逐される瀬戸際まで推寄せてゐたのだから、貴族士官の外國移住から軍隊に飢饉を起し、この最もやくざな中尉殿までが相場が上つて、一足飛に

大將といふ高値が出て來なかつたら、彼は當然軍籍を除かれる筈であつたのだ。凡べてこのやうな苦しい修業は彼の自惚を奪ひ去つた。自分の分に安んずる事を餘儀なくさした。而して世間は自分のやうな人間に對し、自分の力づくで取れるものは格別、その以外には何一つ與へては呉れないものだといふ事が分かつた。この點に於いて世間は臆病と愚昧から脱して居らぬ。何故といつてナポオレオンは恐ろしい大砲で政治界のがらくた共を容赦なく叩き壊して、世間に有用な仕事をし、呉れたのである。眞實の話、今日英國に住んでゐて見ると、ナポオレオンにしる、乃至ジュリアス シイザアにしる、若し彼等が英國へ攻入つてくれなかつたなら、この國はどんなに損をしてゐるであらうといふやうな事を、吾々は時々考へさせられるのである。

それは兎に角、爰に記す一七九六年五月の午後には、ナポオレオンもまだ若い。年はやつと廿六、そしてつゝ近頃大將になつた許りである。それも一面女房を囿に使用して督政官(當時政府を支配してゐた)に胡麻をすつて貰つたため、また一面前にも言つた貴族の移住に依つて士官の不足を告げた、その虚に乗じた結果でもあり、他面彼が國內の地理に通じ、道路、丘陵、谿谷の位置を悟ること掌を指すが如くであつた爲めでもあるが、抑もまた人民に對して砲火を向ける効力に就ての彼の新しい信仰が大に與つて力があつたのである。彼の率ゐた軍隊は訓練といふ事に係けては、近世の文人を驚倒させてゐるので、その人達は眼前以下のやうな物語が演ぜられてゐても、後年のナポオレオンが「皇帝」としての光彩燦爛たる所に目を眩まされてゐるから、全くこれを信じまいとする

のである。併しナポオレオンはその頃まだ「皇帝」には成つてゐない、つい近頃「小伍長」の綽名を頂戴した許りの時であつて、大に豪氣な所を見せつけて、部下に勢力を張る事を努めつゝある所である。また頭の上に九條鞭を振廻して軍隊式の專制を押し通すまでの位置には進んでゐないのである。フランス革命は主として王政時代の兵卒の俸給支拂を四年宛滞らせる習慣の壓制から脱し乍ら、今度はその代り約束と愛國心一點張で煽て上げ出来るだけ金は一文も拂ふまいといふ、プカロシア式の軍制とは一致しない習慣を作り出した。であるからナポオレオンがアルプス山へ近づいた時には一文なしの襤褸を被つた、従つてあまり訓練される事を好まない、殊に成上り者の軍司令官などに訓練される事を好まない、厄介な士卒共を率ゐてゐたのである。かういふ事情で

あつて見ると理想家肌の軍人なら大にまご付かざるを得ないの
 であらうが、ナポレオンにはこれが却て一千門の大砲位の値打
 である。彼は部下の軍隊に向つて曰く、「お前達は愛國心と勇氣を
 持つてをる。併しお前達は金が無い、服がない可哀な程亂暴な
 糧食を宛がはれてゐる。イタリヤへ行けば、そんなものは何でも
 ある、お身に名譽もある。分捕を當然軍人の權利と考へてゐる大
 將の下に率ゐられたわが忠良の士卒のこれをとるのは自由であ
 る。余は斯くの如き大將である。En avant, mes enfans! (進め、子供ら
 !) 結果は正しく彼を欺かなかつた。軍隊は蝗勢がサイプラス島
 を征服した如く、イタリヤ全土を征服した。彼等は晝は終日戦闘
 し、夜は終夜行軍し、とてもと思ふ遠距離を長驅し、これはと呆れる
 場所に出現した。それといふのがどの兵士も自分の背囊には元

帥の官章を入れてゐるのでない、却つて翌日はその中に少くとも
 半ダースの銀肉叉を入れることができるといふ希望をかけてゐ
 るからである。
 序でだから斷つて置くがフランス軍はイタリヤ人に對して戦
 争を仕掛けてゐるのではないのである。彼等の征略者たるオオ
 ストリア人の専制から彼等を救ひ出し、彼等に共和政治を與へて
 やらうといふのである。であるから偶然彼等に對し分捕を行つ
 た所で、それはたゞ彼等の友達の財産を少し許り勝手にしたとい
 ふ事に過ぎない、彼等はむしろこれを感謝せねばならぬ、忘恩とい
 ふ事が諺のやうに唄はれたイタリヤ人の缺點でさへなかつたら、
 彼等は多分感謝したに違ひない。所で又當の對手のオオストリ
 ア人はといふと、これは又徹頭徹尾尊敬す可き規律嚴重の軍隊で

ある。訓練も届いてゐる。これを率ゐる者は戦術に練熟した立派な紳士達である。その中の首領はポオリユウであつて、ウキンナからの命令を受けて古式な戦術を行つた爲めに、却つて本職らしい戦争の型や、パリイからの命令を拒絶して、一切自分自身の責任で決行したナポオレオンの爲めに、こつびどく遣つ付けられた。よしまたオオストリア軍が最初の戦に勝利を占めたとした所が、例の先例格式で彼等はきつと一先本營に歸つて午食後の茶といつたやうなものを飲みに行かればならぬ。その時まで待つてゐればいゝのだ、勝利は必らずこつちへ取返す事が出来るのである。この筋道を追つて後にマレンゴの目覚ましい大捷も博し得たのである。要するに敵軍の方にはオオストリア式の政治家氣質、古風な將軍氣質、ウキンナの貴族的な社會組織の餘弊などい

ふハンデイキヤツプが付いてゐるから、ナポオレオンは何も英雄的な奇蹟を行ふ事を要せずして既に先方に敵對力なき事を看破したのである。併し乍ら世間といふものは、由來奇蹟を愛し英雄を愛し而して學究的の戦術や、ウキンナの交際社會の應接間といふやうなものがあるが、どんな力を持つてゐるか、更に分らないものである。かくの如くにして世間は早くも既に英雄的「皇帝ナポオレオン」の製造を初めてゐる。而してこれに依つて百年後の夢想家をして、前にいつたタヅツアノの村で以下の本文にあるやうな小事件の演ぜられた事實を信ぜしめざらんとするのである。タヅツアノで一等目貫の場所といへば此村の小さな宿屋のある邊である。宿屋といふのは村の入口、ミランからロダイへ通る旅客の一番先に足を入れる所にある。家は葡萄園の真中に建

つてゐて、その第一等の客室は、夏しらず、うしろの方には葡萄園の方
 に向つて廣々と開放されてゐるから、殆んど全體が大きな廊のや
 うに見える。二三日前の警報に驚かされ今朝の六時にはフラン
 ス軍の侵入にあひ非常に氣の立つてゐる村の子供達の中でも大
 膽な奴は、フランス軍の司令官がこの室に泊り込んだ事を知つて
 ゐて家の前の窓から中をのぞいて見たいといふ衝動には驅られ
 てゐるが歩哨に當てゐる貴族出の軍人が本當の髯がないので軍
 曹に長靴の靴墨で恐ろしい鍾馗みたいな髯を顔の上に描いても
 らつてひどく六づかしい顔をして立つてゐるのが怖さに、どう爲
 ようか決せずにある。この歩哨の着てゐる重苦しい軍服は當時
 の軍服が凡て然る如く當人の健康や着心地の如何にはまるで頓
 着なく見得を主にして出来てゐるので、かん／＼日に照らされて

汗がだく／＼出る、描いた口髯の先は流れ出して細い糸を引いて
 腮に垂れ、頸の周りをめぐつて、こち／＼に漆の固まつた所で止つ
 てゐる。而して波をうつた髯の輪廓は所々に小さな灣や岬を作
 つてゐて、百年後の歴史の眼からは何とも言はれぬ程可笑しく見
 えるが、當時の北イタリヤの子供には、この恐い伯父さんは随分退
 屈まぎれにはそこらに遊んでゐる子供を、つい銃劍の尖で芋刺に
 し生のままでもむしやり、食位な事は爲かねない人だと考へてゐ
 るのであるから、こんな髯さへ怖くも恐ろしくも見えるのである。
 夫れにも拘はらず、一人悪戯な女の兒は、凡ての女が軍人に對して
 有する特權を感じる本能が既に芽を出しかけてゐるので、一番安
 全さうな窓から一寸隙見をやらかし、歩哨がぢろりと視て劍をち
 やらんとはいはせるや否や一目散に逃出した。その時彼女の見た

所は大抵前から見て知つてゐる事であつた。奥の方は葡萄園で古い搾酒機や車が葡萄の樹の間に見える。自分の直ぐ右手の扉は宿屋の入口へ通じてゐる。これに並んですつと奥にあるその宿屋で一番立派な食器棚は、今しも盛にナンナの仕度で賑はつてゐる。向ふ側には暖爐が切つてあり、その傍に寢臺がある。この寢臺と葡萄園の間に奥の室へ通ずる扉がある。中央の食卓の上にはミラン風のリソットオ、乾酪、葡萄、麵麩、橄欖などの食物に、柳苞に入れた大きな赤酒のフラスコが置いてある。

宿屋の亭主のシウセツルランテイも初めて見る顔ではない。彼は色の黒い快活な、ちよこくした、愛想のいふ、黒い縮れツ毛で、鐵砲弾見たいな頭のいつもにややく笑つてゐる四十許りの小男である。勿論彼は平生でも申分のない宿屋の主人ではあるが今

夕は殊にフランス軍の司令官を客に迎へて、一晚兵隊共の我儘から保護する事を仰せ付かつた幸運に酔つて、いつもとは特別違つた元氣である。實際彼は搾酒機の下に深く隠して置く筈の金の耳環も出して耳に着けてゐる、大切な家の重寶にしてゐる銀の小皿も持ち出した。

ナポオレオンといふ人は全く初めて見る顔で、のぞいてゐる女の子の兒に向き合せてテエブルの向側に坐し、例のナポオレオン帽も劔も、鞭も、寢臺の上に轉がしてゐる。彼は今頻りにこつこつ働らいてゐる。彼は一方では例の凡べての献立を同時に攻撃して十分間に胃の腑へ送り込んで了ふといふナポオレオン式の忙しい食事をしてゐる。(このやり方が彼の失敗の始まりである)。一方では地圖を展いて記憶で訂正をやつてゐる、時々口から葡萄の皮を

咄出して拇指で封糊のやうに地圖の上へ貼り付けて、軍の配置を印してある。彼の前には、筆やら紙片やらが皿やソースの小瓶と一緒にごたくと置かれて、彼の長い髪の毛はリソットオの汁の中へ這入つたり、インキの中へ飛び込んだりしてある。

亭主。ええ、閣下は――

ナポオレオン(地圖を凝視したまゝ左の手で器械的に食物を運んである)。喋るな。俺は忙しいのだ。

亭主(上機嫌の調子で)。へい、へい、恐入りました。

ナポオレオン。おい、赤インキを。

亭主。さあ、しまつた！ 生憎みなきらしました。

ナポオレオン(コルシカ式の悪洒落に)。何でも殺して、その血を持つて来い。

亭主(にや〜爲乍ら)。左様、閣下の御乗馬か、歩哨の方か、二階の御婦人か、さもなければ手前の家内、まづその外には差當り何にもごいませんがなあ。

ナポオレオン。貴様の女房を殺せ。

亭主。へい、畏りました。所が、閣下、生憎な事には手前より嗅の方が強うございましてな、反對に手前が殺されて了ひます。

ナポオレオン。どちらでも早い方がいい。

亭主。誠にはや有難い事でございます。(手を延ばしてフラスコを取り)。でも、この酒で大抵御用は足りさうでございます。

ナポオレオン(慌て、フラスコを押へ大真面目に)。酒を！いかん、むだな所爲をしちやいかん！貴様達は皆どれもこれもむだな奴らだ！むだだ！むだだ！(肉叉をヘンの代りに使つて肉汁で地圖に印しを付ける)。下げてくれ。(酒を呑乾し、椅子を後ろの方へ引いて、兩足を踏み延して仰向けに凭掛り、やはり六つかしい顔をして考へ込み乍らナプキンを使つてゐる。

亭主(食卓を片付け、汚れものを食器棚の盆の上に載せる)。

閣下

下、何事も商賣柄でございます。手前共宿屋商賣の者はそれ相應價段の廉い酒をとり付けてをりますから、酒をこぼす事などは何んとも思ひは致しません。あなた様のやうな豪い大將方になりますと、いくらも價段の廉い血のお持合せがございますから、やはりそれをこぼす事などは何んとも思はない、といった譯でございませうな？

ナポオレオン。血を買ふには何にも要らん。酒を買ふには錢が要る。(立上つて暖爐の方へ行く)。

亭主。閣下、世間では閣下の大事になされぬものは、

人間の命ばかりぢやなぞと申すさうでございます。

ナポオレオン。人間の命ばかりはどう大事にしやうもないのだからなあ。(寢臺の上へころりと轉る)。

亭主(賞嘆する如く)。なある程! 閣下、手前共のやうな者はあなた様の前へ出ましては、何といふ馬鹿げた奴に見えるでございませう! 手前などもせめてあなた様から、御成功の秘訣といつたやうなものでも授かりましたら!

ナポオレオン。イタリアの皇帝にでも、ならうといふのかい、おい?

亭主。いやはや面倒な、厭な事でございます。そんな事はみんなあなた様にお任せ申しますよ。それに、手前が皇帝なんぞに成りましたら、第一この宿屋はどう成りませう。手前がかうして宿屋を開いてあなた様をお款待致します。傍から眺めて、あなたは面白がつてあらつしやる! ところで今度はあなた様がヨオロツバの皇帝にお成んなすつて、手前の代りにこの國をお治め遊ばす、その時には手前、傍からゆるりと拜見致しますせう。(お喋りを爲乍ら地圖とインキ壺を動かさないやうにして、テーブル掛を取り、兩手に四隅を持ち、端の中央を口に啣へて

褶み初める。

ナポオレオン。ヨオロッパの皇帝だ、おい？ たつたヨオロッパだけかい？

亭主。これははしたり、なある程？ 全世界の皇帝で！ いやはやご尤も！ (テエプル掛を折つては褶む。その度毎に言葉に力を入れる)。人間といつてもどれも似た者でございませす。(褶む)。國といつてもどれも似た者でございませす。(褶む)。戦争といつてもどれも似た者でございませす。(テエプル掛を折つて了つて、食卓の上で軽く叩き、巧みにまるめて結びの言葉のやうに) 一つ取つたからにやあ、みんなとつ

てしまふのですな。(棚の方へテエプル掛を持って行き、抽斗に仕舞ふ)。

ナポオレオン。而してみんな人の爲に、國を治めてやつて、みんな人の爲めに戦をしてやつて、表向だけは萬人の主人であるやうな顔をして、その實萬人の奴隷に爲るか、なあ。

亭主(棚の傍で)。閣下。

ナポオレオン。俺の話を俺にするのはもう禁制だ。

亭主(寢臺の裾へ来て)。御免下さいませ。閣下は餘程變つてゐらつしやる。豪い方といふものは御自分の話を

さくのが、一番お好きなものですよ。

ナポオレオン。さうか、ぢやあその連中が二番目に大好
だといふものを話せ、何でも構はん。

亭主(面喰つた顔も見せず)。宜しうございますとも。閣
下は何かの拍子に、二階の御婦人がお目には止まりま
せんでしたらうか?(ナポオレオンがばと跳起きて、今の言葉
にふさはしい熱心をもつて亭主の顔を凝視る)。

ナポオレオン。いくつ位な女だ?

亭主。年頃ですなあ。

ナポオレオン。といふと、十七かい、それとも卅かい?

亭主。三十でございます。

ナポオレオン。いい女かい?

亭主。左様、閣下のお目と手前の眼とは違ひますから
な、これ許りはお好きぐで判断して頂かなくてはな
りますまい。手前だけの考へではお立派な貴婦人と存
じて居ります。(狡猾らしく)。あの方のお點心の食卓をこ
ちらへ出させませうか?

ナポオレオン(立上り乍ら粗暴に)。いんやならん、俺の待つ
てゐる士官の戻つて来るまでは、何んにも持つて来る
事はならんぞ。(時計を出して見て、暖爐と葡萄園との間をあら

らこちらと散歩する。

亭主（確信を以て）。閣下、きつとあの御方はオオストリアの畜生等の捕虜におんななすつたのでございますよ。捕虜にでもならなきや、こんな待たせる筈がありません。

ナポオレオン（廊下の影の端の所で振り返り）。亭主、若し貴様の言ふ事が本當になつたら、俺は少くとも貴様を絞殺し、貴様の家内残らず、二階にゐる婦人までも一緒に絞殺す位の事をしなければ、到底腹の蟲は収まらないのだぞ。

亭主。それはもう手前共なぞはどう遊されうと閣下の御意次第でございますが、あの御婦人だけは別でして、何とも手前からお答へは申上げかねます。併し、どんな御婦人でも閣下の仰せ付けに否やを申す者はない筈ではございますが。

ナポオレオン（運動を続け乍ら無愛相に）。ふむ！貴様の首なぞは絞めん、抵抗せん者を捉へて絞罪にした所で面白くもないわ。

亭主（同感に耐えぬ如く）。それはもうそれに違ひはございませんとも。（ナポオレオン、再び時計を出して見る。漸く心

配に成つて来た様子である。いや、さすがにあなた様位な
お豪い方になると違ひますなあ、ちやあんと人を待つ
法を心得てゐらつしやる。これが伍長だとか、少尉だ
とか言ふ人達であつてごらんなさい、三分も待たうも
のなら、怒鳴る、我鳴る、暴れる、耳の傍で打毀が初
つたやうな騒ぎになる所でせう。

ナポオレオン。ジウゼツペ、貴様の諛辭ももう厭になつ
た。外へ出てしやべれ。(再びテエアルの前に坐し、兩手に腮
を支へ、地圖の上へ臂を突き、困つたやうな顔をしてその上をじつ
と眺めてゐる)。

亭主。恐れ入りました。決して御邪魔は致しません。
(盆を取上げ、そろ／＼退参の用意を始める)。

ナポオレオン。彼の男が歸つて來たら、直ぐ此方へよこ
して呉れ。

亭主。畏りました。

婦人の聲(宿屋の中の何處か遠い所から呼ぶ)。ジウゼツ
ペエ！(聲は甚だ音楽的である。而して最後の二音は上降的音
階を成してゐる)。

ナポオレオン(愕として)。ありやあ何んだ？ありやあ何ん
だ？

亭主（勿體らしく盆の端をテエアルの上に突いて、その上へのし掛るやうな身構をして）。あれが例の御婦人でございますよ。

ナポオレオン（うっかりした體で）。はあ。どういふ婦人だ。何處の婦人だ。

亭主。妙な御婦人でございますよ。

ナポオレオン。妙な御婦人といつて何者だ？

亭主（肩を聳して）。何にが分かるものですか？あの人はあなた様より半時間程前にボルゲットオの金鷲館の雇馬車でやつて來たのですよ。全くの一人ぎりでした。

供一人連れませんが。信立袋と旅行鞆が一個、それつきりです。馭者の話ぢやあ、金鷲館へは馬に乗つて來なすつた——しかも立派な鞍を付けた軍馬に乗つて來なすつたと言ふのでございます。

ナポオレオン。女が軍馬に乗つて！そいつは妙だな。

婦人の聲（今度は、最後の二音、決然たる下降的音階を爲す）。ジウ

ゼッペー！

ナポオレオン（立上つて耳を傾け）。變つた聲だな。

亭主。變つた方でございますよ。（呼び乍ら）。奥様、只

今、只今。（奥の室へ行かうとする）。

ナポオレオン（岩盤な手で亭主の肩の所を捉み乍ら）。待て。
あの女をこつちへ來させろ。

聲。ジウゼッペッたらねえ!!（瘡聲になる）。

亭主（哀願するやうに）。閣下、どうかお離し下さい。御
客様に呼ばれて、直ぐ参りませんやうでは、手前共の
商賣が廢ります。手前は軍人としてあなた様に御願申
します。

男の聲（宿屋の外の扉口から呼ぶ）。おい、誰か居らんか。
亭主。亭主は居らんかあ！（誰か入口の腰掛を鞭の柄で力
任せに叩き立てる）。

ナポオレオン（急に忽ち司令官の威嚴を回復し、亭主を離す）。彼
奴漸く歸つて來た。（奥の扉を指し）。行け、貴様の商賣を
すませて來い。お客様が呼んでゐるわ。（暖爐の方へ進み
これに背を寄せて、嚴然たる軍人的姿勢を以て立つ）。
亭主（蟲の息を吐き乍ら盆を引奪るやうにして）。有難うござ
います。（奥の室へ駈けて入る）。
男の聲（瘡癩を起こして）。ここの家の奴等はみんな眠つて
居るのか？

（暖爐に對した前面の扉は亂暴に蹴開けられ、汚れくさった少尉
が室の中へ闖入する。彼は二十四歳位、少し足りない所のある若

者で、上流の人間らしい肌理の細かな綺麗な皮膚をしてゐる。而して貴族特有な高慢ちきな様子子が、フランス革命を喰つても一向になくならない。厚ぼつたい馬鹿げた唇をして、珍らしい物を追ふやうな、軽々しく物を信する眼、片意地な鼻、而して大きな自信の強さうな聲を持つてゐる。この若者は恐怖といふ事を知らぬ、尊敬といふ事を知らぬ、想像もない、感覚も働かない、ナポオレオンの思想も、その他何の思想を持つて來てもとても通じない、馬鹿馬鹿しく野郎自大な見るからに天使でも踏む事を憚るやうな場所に、飛込む事を以て、最大の得意とする人物らしい、無暗に元氣な男である。彼は、今頭から湯氣を立て、業を沸やしてゐる最中である、これを觀て皮相的な觀察者は、彼が宿屋の者を呼んでも直ぐ出て來なかつたのを憤慨した結果と解釋する、併し一段具眼の士は、そ

の中、或る深刻な精神的の原因を發見し、一層永久的な重大な悲痛の表現を看破する事が出来る。ナポオレオンの姿を見ると、彼も流石に悸として立竪んで敬禮した。併し乍ら彼のこの場合、この態度をとつたのは、決して後のマレンゴオ、オオステルリッツ、ワアテルロオ、セント・ヘレナに於けるナポオレオン、さてはドラロシエやメイソニエに依つて描かれたナポオレオンの戦畫等、凡べて當今の教育を受けた者がナポオレオンといふ人物に對して、本能的に期待するやうな英雄の風貌を豫言的に認識して、これに特別の尊敬を拂つた譯でも何んでもないのである。

ナポオレオン(鋭く)。おい、君は、今頃やつと歸つて來たのか。君の受けた命令は、私が爰へ六時に着く筈だから、それまでに君はパリイから來た郵便や、秘密書

類を持つて爰に来て、私を待つてゐるといふ事であつた。もう八時に十二分すぎてゐるぞ。君は騎馬の達者だといふからこの任務を授けるに當つて、特に軍中第一の駿足を貸してやつたのだ。然るに君は一百分から遅れて、しかも徒歩で歸つて来た。馬は何處へやつたのだ？

少尉(膨れツ面をして手袋を脱ぎ、帽子も鞭も一緒にテエアルの上に叩き付け)。さあ、全く何處へ行つたでせうな？ 大將閣下、私も是非それを知りたいと思つてをる所であります。(感激を以て)。私がいかに程あの馬を愛したか、

とても閣下にはお分かりになりますまい。

ナポオレオン(憤々して嘲弄的に)。なるほど！(突然疑心を生じたる様子)。だが手紙と秘密書類は何處に在る？

少尉(驚くべき珍聞を齎して来てゐるせいか、どちらかといへば、浮かれてゐて、勿體らしく)。私は知りません。

ナポオレオン(自分の耳を信する事が出来ない)。なに貴様、知らん！

少尉。その點に於いては閣下と御同様であります。では愈、私は軍法會議に廻されますかな。なあに、軍法會議になんか廻されても構んです。併し乍ら(嚴然たる

決意を表はして)。大將閣下、眞實です、私はどうしてもあの無邪氣らしい顔をした若い奴を捕へたら、あの綺麗なしやつ面を滅茶々にしてやらなくてはならんです。おべんちやらの嘘吐小僧奴！私は彼奴の人相書を作つてやります。それから私は――

ナポオレオン(暖爐よりテエアルの方へ進み寄り)。

何、無邪

氣な顔をした若い奴がどうしたと？おい、すつかり白状しろ、残らず譯を話して了へ。

少尉(テエアルの向側に、拳固を突いて、ナポオレオンと眞向ひに面して立つ)。ええ、よろしいですとも、私はいつでも

この顛末を残らず陳述する事を辭せんのです。私は軍法會議に廻されましても、私に何の過失もなかつた事を立派に證明する積であります。つまり私は私の性質の善良な方面を、うまく、敵に利用せられたのであります。私はそれを恥辱とは考へません。併し乍ら大將閣下、私は軍司令官として閣下に十分の敬意を表するに拘はらず、再び申します、私はいつかあの悪魔の倅奴を見付け出しましたら、私は――

ナポオレオン(憤然として)。

それは前にも言つた事だ。

少尉(直立不動の姿勢を取り)。

私は再び申します。まあ

一寸彼奴を捉へるまで待つて下さい。一寸待つて下さい、それでよろしいです。(決心せる如く腕を組み、堅く唇を結んで荒く息使ひをする)。

ナポオレオン。私は待つてゐるのだ——君の辯解を。

少尉(自信あるらしく)。閣下、閣下は私がいかなる事件に遭遇したか、その顛末をお聞きになつたら、恐らく閣下の御聲は調子が變るでせう。

ナポオレオン。君は何んにも爲てをりはせんぢやないか。その通りぴん／＼してゐて、怪我一つ爲て居らん。一體君に托した書類は何處に在るのだ？

少尉。何んにもないです！何んにもないです！！ああ困りましたな！さうだ、よろしい、まあお聞きなさい。

(身繕ひをする、珍事實の報道で一番ナポオレオンを煙に巻く積である)。彼奴は私と永久に變らぬ兄弟の誓を結びました。これで何んでもないでせうか？彼奴は私の眼付きが自分の姉にそつくりだと言ひました。これが何んでもないでせうか？彼奴は泣きました。——全く泣いたのです——私がアンジェリカと別れた話に泣いて呉れたのです。それが何んでもないでせうか？彼奴は二本とも酒の代を拂つて呉れました、その癖自分にはただ麵麩

と葡萄酒を取つただけでした。多分閣下はそれまでも何んでもないと仰しやるでせう！ 彼奴は私に自分のピストルを呉れました、馬を呉れました、それから秘密書類——最も大切な秘密書類を呉れました——而してそれを持たせたまま私を歸さうとしたのです。(首尾よくナポオレオンを煙に巻いて、呆然自失といふ状態に陥れたので、大に勝誇り)。それが何んでもないでせうか？

ナポオレオン(意久地なく驚いて了ひ)。何んの爲めにそんな真似をしたんだらう？

少尉(分かり切つてゐると言ふ風に)。私に信實を見せる爲

めですよ。(この時ナポオレオンの下颯は必らずしも落こつたとは言はぬ、併しその番ひは無神経になつた。少尉は構はず、心から憤慨して辯じ続ける)。而かも私は十分それだけの信實を受ける資格がある。私はこれに對して十分正當に酬ゆる方法を取りました。併し、どうです、閣下——私も彼奴に私のピストルを預け、私の馬を預け、それから私の秘密書類を預け——

ナポオレオン(激怒して)。何にを馬鹿な、何故そんな所爲をするのだ？

少尉。何故といつて、勿論、彼に對しても私も信實を

見せる必要があるかと考へたからであります。然るに彼奴は私を賣つたのです——約束を蹂躪したのです。——決して再び歸つては來なかつたのです。盜坊！詐偽師！人情知らずの、虚吐きの、大悪黨の小僧奴！閣下はこれでもまだ何んでもないと仰しやるでせうな。併し乍ら、閣下、まあ、よろしいですか、（一層語勢を強める爲め、再び拳固をテエブルの上に固めて）。閣下がこのオオストリア人から受けた無禮を容赦してお置きなさらうとも、それは閣下の御随意であります。ただ私一個人として申しますならば、宜しいですか、見付次第私は——

ナポオレオン（思々しさに踵を返してくるりと背中を見せ、熊焦し乍ら再びあちらこちらと運動を始める）。おい、一つ事を何度言ふのだ。少尉（激昂して）。何度も、一つ事を！言ひますとも、五十度でも、百度でも、よろしいですか、閣下、私は彼に信實を見せようと思へばきつと見せます。私はきつと——

ナポオレオン。さうか、さうか、それはきつとさうだらう。だがその男といふのは一體どういふ種類の男なのだ？

少尉。左様、彼奴の所業に照らし合はせてお考へになれば、どういふ種類の男といふ位はお分かりになる筈だと思ひます。

ナポオレオン。黙れ！どんな様子の男だといふのだ！

少尉。どんな様子の！彼奴の様子は、左様さ——まあ人間を一寸ごらんになるのがいいですな。どんな様子の野郎だか大抵見當はつきますよ。だが私が彼奴を捕へてから五分も経つたら、もう彼奴の様子は分らなくなつてゐるでせうな。何故といつて私は彼奴を捕へて——

ナポオレオン（猛烈に宿屋の亭主を呼立てる）。ジウゼッペ！

（全く忍耐を破つて、少尉に向ひ）。黙つて下さい、どうか。

少尉。御注意までに申し上げて置きますが、私に罪を被せようとなすつてもだめですよ。（訴ふる如く）。あの人間がどんな種類の人間だといふ事が、どうして私に分るでせう？（食器棚と入口の扉との間から椅子を持つて来て、テーブルの傍に置き、その上に腰を掛ける）。閣下は私がいかに程空腹で、且つ疲勞して居るかといふ事さへ御存じであつたら、もう少し取扱ひに氣を付けて下さるはずですよ。

亭主（戻つて来て）。閣下、何か御用でございますか？

ナポオレオン（込み上げて来る瘡癩を抑へつゝ）。此——此の士

官を連れて行つて呉れ。飯を食はして、必要があつたら寝床の中へ突込んで呉れ。それからもう一度正氣に復つたら、一體どういふ目に逢つたのだから、委しく訊ねて知らしてくれ。(少尉に向ひ)。おい、君は、捕縛を覺悟して居るだらうな。

少尉(膨れつ面をしてつんくした調子で)。覺悟して居ます。紳士を解するには紳士を要すだ。(劍をテーブルの上へ投り出す、亭主はこれを取上げて恭しくナポオレオンに捧げる。ナポオレオンは手荒にこれを寢臺の上に投げ付ける)。

亭主(御氣の毒なといふ様子で)。少尉さん、あなたはオオス

トリア兵に襲はれましたな？ やれ〜！ やれ〜！

少尉(侮蔑する如く)。襲はれた！ へん俺はこの拇指と人差指の間に挟んで彼奴の脊骨をへし潰す事も出来たのだ。今思ふと、やつつけてやりやあよかつた！ いんや、いかん、彼奴は俺の性質の善良な方面へ持ちかけて来やがつた、それぢやあとても俺には敵はん。彼奴は生まれてまだ俺のやうな好もしい男に逢つた事がないといふのだ。彼奴は虻が食ひ付くと、いけないと言つて、俺の頸にハンカチを纏き付けやがつた。ほうら、これだ！ (頸飾の中からハンカチを引つ張り出す。亭主之を手にと

つて検査する。

亭主(ナポオレオンに)。閣下、御婦人のハンカチですよ。
(匂を嗅ぎ)。佳い匂がしますな!

ナポオレオン。ええ? (ハンカチを取上げてしげくと睨入つて
ある)。ふむ! (匂を嗅ぐ)。ははあ! (ハンカチを凝視め乍ら
ひどく考へ込んで室を筋かひに歩き廻り、結局ハンカチを上衣の
胸に藏めて了ふ)。

少尉。兎に角、彼奴には相應したものだ。彼奴が甘つ
たれた風で俺の頸筋に觸つた時には、まるで女のやう
な手だと思つたからな。畜生、あの下等な女の腐つた

やうな小僧奴! (一大事といふやうに聲を秘め)。併し、聞
いて下さい、閣下、若し私が――

婦人の聲(外で、前のやうに)。ジウゼッペ!

少尉(化石したやうに)。ありやあ何んだ?

亭主。なあに、二階の御婦人が私を呼んでゐるんです
よ。

少尉。御婦人!

聲。ジウゼッペ、ジウゼッペ、何處へ行つてるんだら
うねえ?

少尉(人殺しのやうな顔をして)。その劍を呉れ。(大股に寢臺

の方へ歩み寄り、劍を引奪つてこれを抜く。
亭主。少尉さん、どう爲ようといふんです？あれは御
婦人の方ですよ。あの通り女の聲なのが分りませんか
？

少尉。彼奴の聲だ、彼奴の聲だ。離せ。

(振もぎつて奥の室へ突進する。忽ち鼻の前に屏は開いて妙な
貴婦人が這入つて来る。女は甚はだ目に立つ器量の婦人である、
背の高い、擧止の恐ろしく淑やかな、くりくりと利發らしい、物解り
の早い、訝るやうな顔付、額には知覺力、鼻孔には敏感、腮には品格、そ
の他凡べての感じに鋭敏な、文雅な而して獨創的な所がある。嫺
やかに女らしくはあるが、決して弱々しくはない、すんなりした華

奢な姿で強い骨格を蔽つたといふべきである。手も足も、頸も肩
も、さばつたら直ぐ破れさうな飾物ではない、すらりとした身長に
釣合つて、十分發達してゐる、背競べでは、ナポオレオンや宿屋の亭
主はとて、敵はない、少尉すらも背比べをしたら、さしてひけはと
りさうもない高さである。ただ彼女の優美の風姿と輝くやうな
愛嬌とが、身體の大きい所や膂力があるといふ所を隠してゐる丈
である。この女はその服装から判断すれば、督政官時代の最新旅
行の嘆美者ではない。それとも多分旅行中古い服を使ひ切る積
なのかも知れぬ。何れにしても彼女に馬鹿々々しい袴を付けた
シヤケツは着てゐない、希臘質ひのキトンも着ない。彼女の花模様
の服は、腰を長く作つて後ろにワトウ風の襷が付いてゐる。襟は
低い、グリーンイム色の襟巻でつぎ足しをしてゐる。金茶色の髪は

毛に灰色の眼、美人である。
 女は貴族にして、且美人といふ特權に慣れた女の自尊を以て、つかつかと申へ進み入った。宿屋の亭主は至つて自然な様子を見せ、彼女に對しては可なり鑑賞的である。彼女の眼の、始めて落ちたのはナポオレオンであつたが、これは忽ちにして自意識を叩き破された。彼の色は愈赤くなり、前よりは身體が硬ばつて、それははし出した。彼女は刹那にこの光景を認識して、餘り彼を面喰はさせまい爲めに、何んともいへない大様な様子で他に振向いても一人の紳士に對し一瞥の敬意を拂つた。この紳士は先刻よりして、彼女の服裝を凝と見詰めたまま、そこに行はれてゐる、地球上に於ける大詐欺最後の傑作を、全く言説の外に絶した不思議な感情で眺めてゐるのである。女は彼を見ると、忽ち死人のやうに蒼

くなつた。その表情には、何等誤解を惹起す餘地がない、全然豫期しなかつた宿命的な過誤の啓示に達つて、平靜安心勝利の眞只中から突如として恐怖のどん底に突落された人の表情である。する中に次の瞬間には一道の紅みはクリム色の襟卷の下より迸出し、やがて女の全面に漲つた。今や女の全身が火のやうに熱つてゐる事は一見して分る。平生は觀察なんといふ能力のまるでない、その上今は湧き起る憤怒に我を忘れてゐる少尉ですら、眼前一人の人間が自分の爲めに眞赤になつた事を見た。彼は直にこの赤面を暗い詐欺を冒した者がその犠牲に出會して我知らず湧起つた懺悔と解釋して、報復的勝利の高い叫びをあげて指しを爲すや、やがて女の腕首を捉まへて室の中へ曳摺り込み、うしろの扉をハタと閉し、これに背を向けて立はだかつた。

少尉。さあ、小僧捉へたぞ。こんなに姿を變へてしまつたな。雷の様な聲で。その袴をとれ！

亭主(押止めて)。まあ、何です、少尉さん！

婦人(恐怖は爲乍ら、彼が自分の身體に觸る事を敢てしたので大に憤慨して)。皆さん、お願いします。ジウゼッペ。(亭主の方へ駈けて行かうとする様子を示す)。

少尉(劍を手にしたまふ、道を塞いで)。逃げる事はならんぞ。

貴婦人(ナポオレオンの影に隠れて)。ああ、あなたは士官

——大將様です。あなたは私を保護して下さいませ

う、ねえ？

少尉。閣下、打棄つてお置きなさい。この男の始末は私に任せて下さい。

ナポオレオン。この男の始末！誰の事だ！何んと思つて君はこの御婦人にそんな所爲を爲るのだ。

少尉。御婦人ですと！馬鹿な、男ですよ！私が信實を見せた男ですよ。(脅嚇的に前に進み)。さあ貴様——

貴婦人(ナポオレオンのうしろへ駈けて行き、激動の餘り、男が本能的に楯になる積りで差出した腕にしがみ付き乍ら)。ああ將軍、有難うございます。どうかあの人を追出して下さい。

ナポオレオン。おい、馬鹿は止せ。この方はたしかに御婦人だわ。(彼女は気が付いて急にナポオレオンの腕を離して、また顔を赤くする)。それから君は。その剣を下へ置きなさい。直ぐに。

少尉。大將閣下、眞實です、この男はオオストリア方の間牒です。彼は今日の午後マッセナ大將の司令部の者だと言つて私を欺いたのです。而して今度は女に化けて再び閣下を欺かうとするのです。私は自分の眼を信じてはならんでせうか、どうでせう？

貴婦人。將軍、それぢやあきつと、それは私の弟に違

ひありませんよ。弟はマッセナ大將の司令部附ですから。それに弟は大變私によく似てをりますから。

少尉(勇氣が挫けて)。貴様は貴様の弟でなくつて、姉だといふんだな？——私にそつくりだといふ姉だといふんだな——私と同じ美しい碧い眼を持つてゐる姉だと言ふんだな？嘘だ。貴様の眼は俺の眼にちつとも似ては居らんぞ。貴様自分の目にそつくりだわ。何といふ卑怯な奴だ！

ナポオレオン。少尉、君は結局、この方が紳士でないといふ事が確になつたのであるから、私の命令に従つて

直ぐこの室を出て貰はうか？

少尉。紳士ですと！私は到底考へられんです。紳士たるものが私の信實を無にして――

ナポオレオン（疝癢を起して）。もう澤山だ、澤山だ。室を出て貰はう。私は命令する、室を出ろ。

貴婦人。いいえ、もうどうか、私があちらへ参りますから。

ナポオレオン（冷淡に）。奥様、まあ、お待ちなさい。私はあなたの弟御さんには十分敬意を表するが、併しまッセナ大將の司令部附士官が何用あつて私の手紙を欲し

がるのか、更に要領を得ないのだ。私は少しあなたにおききまをしたいたい事がある。

亭主（慎重に）。さあ少尉さん。（扉を開く）。

少尉。行くよ。併し大將閣下、私の警告をおききなさい。閣下の性質の善良な方面に御注意なさい。（貴婦人に）。奥様、失禮でした。私はあなたを同じ人間だと考へたのです。ただ男と女と反対な丈で、人間は同一の人間と考へたのです。それが私を迷はせました。

貴婦人（優美に）。いいえ、あなたが悪いのではありませんよ。さうですとも、ねえ？少尉、直き御腹立

が直つて何よりお嬉しう存じますわ。(手を差出す)。
 少尉(身體を曲げて優美らしく接吻する)。ああ、奥様、も
 うそんなことは——言ひかけて手をながめ)。おや、あなた
 は弟御と同じ手ですね、それに同じ質の指環を穿めて
 るますね。

貴婦人(優美に)。私共は双生兒でございますもの。

少尉。それで分かりました。(手を接吻する)。どうも濟みま
 せんでした。私は秘密書類の事なんぞはどうでもよろ
 しいです。それは私の知つた事ぢやない、大將閣下の
 知つた事なんですからな。たゞ私の性質の善良な方面

を利用して私の捧げた信實を無にしたのを悪むのです。
 (帽と手袋と、鞭をテエアルから取上げて行きかけ乍ら)。閣下、
 私はもう参りますが、よろしいでせうな。御氣の毒で
 した。(室の外へ出て獨りで喋つてゐる。亭主は跡からついて
 出て扉を閉ぢる)。

ナポオレオン(疔癩を昂らせ切つて、兩人の跡を見送り乍ら)。馬

鹿！(妙な貴婦人は同感といふ顔付で微笑する。ナポオレオン
 は尙、眉に入の字を寄せたままテエアルと暖爐の間を歩む。差向
 ひになつたので却つて極りの悪いのがとれた形である)。

貴婦人。お蔭様で免れました。

ナポオレオン(突然女の方を振向き)。

手紙を。さあ直ぐに

！(手を出してさあ受取らうといふ様子をする)。

貴婦人。將軍！(吾しらす手を襟巻にやる何かそこに大事なもの
が藏つてあるといふ様子である)。

ナポオレオン。あなたは男の姿に化け、あの馬鹿野郎を
欺して手紙を取つた。わたしはその手紙が入用なのだ、
あなたがその著物の中に、それその手の下に隠してあ
るその手紙が入用なのだ。

貴婦人(慌てて抑へてゐる手を退けて)。まあ何んといふ酷
い事を仰しやるんでせう！(襟からハンカチを出す)。わた

くし、びつくりいたしました。(涙でも拭くやうにハンカ

チで眼を摩る)。

ナポオレオン。ははあ、あなたはわたしを御存じないと
見える、さもなければわたしのやうな人間に向つて、
泣真似を爲るなんて、余計な面倒はお止めになつた方
がいいでせう。

貴婦人(涙の中に嫣然といふ凄い所を見せ)。いいえ、存じ
て居りますよ。あなたは有名なブォナルテ將軍です
わ。(彼女はナポオレオンの名前をひどいイタリア訛でブウアウー
ナーバルテと發音する)。

ナポオレオン(憤慨してフランス音で)。奥様ボナパアルトです、ボナパアルトです。さあ手紙を、どうか。

貴婦人。でも、わたくし、あのほんたうに——(ナポオレオン手荒く女の手からハンカチを引奪る)。將軍！(憤然)。

ナポオレオン (自分の懐からもう一枚のハンカチを取出して)。あなたは私の部下から強奪をなすつた際、彼にハンカチを一枚下すつたさうですな、有難う。(二枚のハンカチを丁寧に見比べる)。二つともお揃ひだ。(匂を嗅ぐ)。同じ匂だ。(ハンカチをテェアルに叩き付ける)。さあ、手紙を早くして下さい。止むを得ずんば、このハンカチと同様に、

少し許り失禮なまねをしても頂戴するかも知れん。(この史實は十年後、グキクトリアン サルヅウ氏がその『ドラ』と題する戯曲に用ゐた)。

貴婦人(威儀を正して難詰するやうに)。將軍、あなたは婦人を脅迫なさるのですか？

ナポオレオン(ツッキラボウに)。左様です。

貴婦人(鋭鋒を挫かれたので立直らうと焦り乍ら)。でも、わたくし、何んですか分かりません。わたくしは——
ナポオレオン。分かり切つてゐます。あなたが爰へ来たのは、あなたを使つてゐるオオストリアの大將が、大

抵六里先へ私が来てゐる、といふ見當をつけたからです。わたしはいつでも敵の思ひもつかない場所に來て居るのだからね。それであなたも獅子の岩窟へ飛び込んで來たといふものさ。さあ、あなたは勇氣のある婦人だ。序でに物分かりのいい婦人になつて貰はう。わたしはむだに時を費やしては居られん。手紙を貰はう。
(脅す如く一歩前へ進む)。

貴婦人(敵はなくなつたのでダダツ子がわやくをいふやうに、少尉がテエプルの傍に置いて行つた椅子の上に泣き伏す)。わたしは勇氣があるんですつて！何んにも御存じないの

ねえ！わたくしは今日一日、恐くつて途方にくれてゐたんですよ、一寸でも變な眼付や、素振をされる度にはつとして胸を締付けられるやうな苦しい思ひをしたんですよ。あなたは人間は誰でも御自分のやうに勇氣があると思つてゐらつしやるの。それでは何故そんな勇氣のある方が勇ましい仕事を爲ないのでせう。何故勇氣も何にもないわたくし達みたいなものにさういふ仕事を頼むんでせう？わたくしは勇氣なんかありませんよ。わたくしは亂暴が大嫌ひ、危い事をするると死にさうですわ。

ナポオレオン(興を催し)。ちやあ、何んだつて危い中へ飛込んで来たんだね。

貴婦人。だつて外に仕方がございませぬもの。誰も外に頼む人がないんですから。けれどそれももう、みんなむだになりました——あなたのお蔭で。義理も人情もない、恐いといふ事を知らないあなたのお蔭で。——(聲が塞つて膝を突く)。もうあなた、わたくしを返して下さい。何も尋問なんかしずくに歸して下さい。秘密の書類も手紙もみんな上げますから。きつと。

ナポオレオン(手を出して)。左様ですが、待つてゐますよ。

(女は甘く言瞞めて逃げる積でも相手が容赦なく短兵急に攻立てて来るので落膽して太息を吐く。併し困つたやうな顔をして相手の顔を見上げ乍らも内心、どうかして知慧競べに勝つ工夫に腦漿を絞つてゐる事が分る。ナポオレオンも去る者、自若として女の顔を見返してゐる)。

貴婦人(終に小さな溜息をそつと吐いて立上り乍ら)。ちやあ持つて来て上げませうね。わたくしの室に置いてありますから。(扉口へ行きかける)。

ナポオレオン。奥様、わたしも一所に行きませう。

貴婦人(威儀を正して)。將軍、わたくしの室へなんぞお

這入りになる事はお断り申しませう。

ナポオレオン。では奥様、ここに残つてゐて下さい。その間にあなたの室を捜させますから。

貴婦人(諦らめて計策を放棄し、憎らしまうに)。

餘計な御手

数をかけるには及びません。あちらにはごさいませんから。

ナポオレオン。さうです。わたくしは既にその在處を申し上げました。(女の胸を指す)。

貴婦人(可哀相らしく萎れ返つて)。

將軍、わたくしはお願

があるんですがねえ、その中に一つ私用の手紙がある、

それだけとつて置きたいんですがねえ。たつた一つなんですよ。わたくしに下さいましたな。

ナポオレオン(冷刻に)。奥様、それは正當な要求でせうか。

貴婦人(頭から刎れ付けられないので力を得て)。いいえ、で

もそれだから一層あなたにお許しを願ふ理由があるんです。あなた御自分の要求も正當なものでせうか？ 幾千の人命はあなたの勝利の爲め、あなたの野心の爲め、あなたの運命の爲めに、犠牲に供せられてをるではございませんか！ それに比べてはわたくしのお願ひなんかつまらぬことではございませぬか。わたくしはたか

がかよわい女子、あなたは勇氣のある豪いお方です。
 (優しい哀願するやうな眼付で見て再びその前に膝づかうとす
 る)。

ナポオレオン(嚙んではき出すやうに)。お立ちなさい、お立
 ちなさい。(彼は不愉快らしく背を向けて立つて斜めに歩いた、
 何か言はうとしてちよつと止つて、顔だけ向けて)。あなたは寢
 言を言つてゐる、承知してゐながら。(彼女は立上つて殆
 ど喪心したやうになつて寢椅子の上に乗る。ナポオレオンは振
 返つて彼女の態を見た時、自分の勝利は確かだと思つた。そうし
 て此の犠牲を弄んでやらうといふ氣になつた。彼は女の傍へ來

て坐る。女は驚いて少し離れたが、眼は希望の色に光つてきた。
 彼は何か内所な冗談でもする人のやうに)。どうしてわたし
 が勇氣のある軍人だといふことをどうして知つたね?
 貴婦人(驚いて)。まあ、あなた! ブォナバルテ將軍。(例
 のイタリヤ訛り)。

ナポオレオン。さやう、私は將軍ボナパアルト。(極カフ
 ランス音を主張する)。

貴婦人。まあ、どうしてそんなことをお尋ねになるの
 でせう? あなたはつひ二日前、ロデイの橋に立つて、河
 越しに恐ろしい砲戦の大勝負をなすつたお方ではござ

いませんか。(顫え乍ら)。ああ、ほんたうにあなたはお勇ましいことをなすつたのねえ!

ナポオレオン。それはあなたも同様です。

貴婦人。わたくしが! (ふいとおかしな事を思ひつき)。ま

あ! あなたは憶病者でいらつしやるの?

ナポオレオン(瘳猛な笑ひ方をして女の頬をつれる)。さういふ

ことは、決して軍人に向つて發すべき質問ではないよ。

軍曹は新兵に向つて身長や年齢などは聞くが、勇氣が

あるかとは尋ねないからねえ。(彼は一人でからく笑つて、

手を背後に組み、首を垂れて歩み初めた)。

貴婦人(笑ひごとではないといふ風で)。おや、あなたは恐いことがおかしいのですね。ではあなたは恐いといふ事が何んだか御存じないのですね。

ナポオレオン(寢椅子の背後に来て)。どんな者だらう、假

りに一昨日戦の眞最中に、あなたがロディの橋を越えて

わたしの傍まできて、やつと此の手紙を手に入れたと

する、それより外には道が無かつた、これが一番たし

かな道だつたとする。——まあ首尾よくあの砲彈の中だ

けは除けて來られたとして! (女は顫えて暫らく手で眼を

押へる)。恐いと思つたでせうね?

貴婦人。 ええ、 恐いの怖ろしいのつて、 もう死ぬほど。
 (胸に手をあてる)。 考へただけでもぞつとしますもの。
 ナポオレオン(頑強に)。 でも秘密書類を手に入れる爲めには
 来る氣になつたのですね。

貴婦人(恐ろしさを想像して元氣が昂らぬ)。 もうお尋ねなさ
 らずに。 わたくしは来なければならなかつたのでござ
 います。

ナポオレオン。 何故？

貴婦人。 何故でも来なければならなかつたから。 外に
 仕方がなかつたから。

ナポオレオン(確信を以て)。 あなたは恐しさを堪へ忍んで
 も私の手紙が欲しかつたのだ。 大將も士卒も萬人共通
 の一つの情がある。それが恐怖だ。人間の性質にはい
 ろいろあらう、しかしたつた一つ、わたしの軍隊の太
 鼓打の少年も、かくいふわたしも等しく持つてゐるも
 のは恐怖だ。人と人とを戦はせるものは恐怖だ。平氣
 だから逃げ出しもするのだ。恐怖は戦争の源泉なので
 ある。恐怖——私はあなたよりも、外のいかなる婦人
 よりも好く恐怖といふものを知つてゐる。私は嘗てパ
 リイで一揆の爲に虐殺にあふスキス兵の聯隊を見殺し

にした、關係するのが恐ろしかったからだ。私はその光景を覗き込んだ時、足の爪尖まで自分はつくづく憶病者だと思つた。七ヶ月前私は其一揆を大砲で叩き潰して前日の耻を雪いだ。が、其れが何だ。嘗て恐怖の爲に眞實欲しいと思ふ要求を引込ました男があるか。——女があるか。決して無い。私と一所に来てごらん、僅か一杯のブランデーの代のために、毎日死を賭してゐる二萬人の憶病者を御覽に入れよう。あなたもロディの橋の上へ、わたしの傍までやつて來たらもう恐がつてはゐられない。一度橋の上に立てば、必要——さう進

んで欲しいものを捉まうといふ必要の前に、凡べて他の感情は消え失せたにちがひない。
 さあ、そこで今、あなたは萬事を成し遂げたとする、——首尾よく手紙を手に入れてにげ出したとする。爰に至つては悲しい辛い沙汰ではない、恐い一念があくまで目的を握つて放すまいとする。もう恐怖ではない、力になつたのだ。洞察、愼慮、鐵のやうな決心になつたのだ。さあさうなつてからもしあなたに、あなたは憶病かといつて、訊くものがあつたら、何んと言つて答へるだらう？

貴婦人（立上つて）。ああ、あなたは英雄です、ほんたうの英雄です。

ナポオレオン。ウツフ！ほんたうの英雄だなんて、そんなものが何處にあるか。（彼は女の熱心な讚美を軽くあしらひ乍ら、さういはれて決して悪い氣はせず、室内をぶらつき歩く）。

貴婦人。ええ、解りました。あなたのおつしやつたわたくしの勇氣といふものと、あなたの勇氣といふものとは違ふんですね。あなたは御自分のためにロヂイの戦に勝たうとなすつたので、誰人のためにもなかつたのでせう？

ナポオレオン。勿論です。（急に思直して）。いや待つた、さうぢやない。（敬虔的に堅くなり、祭事を行ふ人のやうな調子で）。わたくしは謹んで古ロオマの英雄の足跡を追ふてゆくフランス共和国の僕に過ぎないのです。人道の爲めに我國の爲めに、戦に勝つた、自分の爲めではない。

貴婦人（失望して）。おやおや、そんならあなたは、やつぱり女のやうな英雄なんですえ。（寢椅子の端に臂をのせ、掌に腮を支へてまた座る。熱は一時にみなさめた）。

ナポオレオン（大に驚いて）。女のやうな！

貴婦人（氣にも止めぬ風で）。ええ、わたくしのやうな。

(深い憂愁を以て)。あなたはわたくしが自分じぶんに秘密書類ひみつしよるるがが欲ほしさに、戦場せんぢやうの危険けんげんを侵おかしたと思おもつていらつしやるの？ なんのそれだけのことならわざわざここまで——しかもこの宿屋やどやへまであなたをたづねて、來きやしません。わたくしの勇氣ゆうきは奴隸どれい的てきなのです。可愛かあいさうだ、氣きの毒どくだと思おもふ心こころもち、自分じぶんではない、外ほかの人ひとを助たすけてやりたい、保護ほごしてやりたいといふ本能ほんのうのために、かういふ恐おそろしいこともやれたのです。

ナポオレオン(蔑あざむむ如ごとく)。

チエツ！ (賤せんしむやうに背せを向むける)。

貴婦人きふじん。さあ、それであなともやつとわたくしが勇氣ゆうき

のある女をんなでないといふ事ことが分わかつたでせう。(人を馬鹿ばかにするなといふ風ふうで投げたやうに)。ですが、他人たにんの爲ためめや、國くにの爲ためめ、愛國あいこく心しんで戦たたかつたあなたが、わたくしを輕蔑きげすむ權利けんりが何處どこにあります。わたくしが女をんなのやうなと申まを上げたのはここです、フランス人じんらしいことねえ！

ナポオレオン(猛烈めうれつに)。わたしはフランス人じんではない。

貴婦人きふじん(無邪氣むじゃぎに)。

わたくしはね、あなたがお國くにのため

にロヂイの戦いくさをしたのだと仰おつしやつたやうに存ぞんじましたの、ねえ、將軍しやうぐんブウ——わたくしお名前なまへをイタリア風ふうに申まをしませうか、フランス風ふうに申まをしませうか？

ナポオレオン。奥さん、いい加減にして下さい。わたしはフランスの民としては生れました。フランスの國に生まれたのではないのです。

貴婦人(寢様子の角に腕を組んで、その上に頭をのせ、だんだん男が好きになってくる様子)。あなたは何の國の民として生れたなんといふ事はないのでせうよ、きつと。

ナポオレオン(大よろこびでまた新らしく散歩をはじめ)。ええ？ええ？さうでせうか。

貴婦人。きつとさうですよ。

ナポオレオン。なあに、そんな事はない。(自分乍ら得意の

調子が耳にひびいたので顔を赤くして語を切る。それからすぐ古英雄の型に則つて厳格な態度になり、道義的な調子で)。然し乍ら、人間は決して自分の爲めばかりでは生きられないものだ。常に他人の事を考へ他人の爲めに働き、他人の利益の爲めにこれを導き、統べることを忘れてはならぬ。自己を犠牲にすることは高邁な人格の基礎なのだからな。

貴婦人(溜息をついて再び寛いだ様子になり)。おやおや、そのくせあなたはついで、それを御自分には實行なさらなかつたのね。

ナポオレオン(憤然、ブルタスもスシピオも何にもみな忘れて)。
奥様、何にをいふのです？

貴婦人。人といふものは自分に得られなかつたものの
価値を、いつも大袈裟に話すといふことにあなたはお
氣がつかいませんか？ 貧乏人は金持にさへなれば幸福に
なれると考へてゐます。同じ理屈で人は眞實とか、純
潔とか、利他とかふい事を崇めます——といふのがつ
まりさういふものにぶつかつた経験がないからで、ま
あ、一度その味を知つたら！

ナポオレオン (小癩なといふ風で)。一度その味を知つたら

！へえ、あなたは御存じかい？

貴婦人(手を下して膝を押へ、眞直に前を見乍ら)。ええ不仕合
せにも生れが好うございました。(暫時對手の方を見上げ
て)。わたくしはほんたうに眞實で、可笑しいほど人の
爲めを思ふんですよ。けれどそれは意氣地がないから
です、人格がない、ほんたうの強いしつかりした自分
といふものがないからです。

ナポオレオン。はあ？ (強い興味 of 眼を向ける)。

貴婦人(ますます熱心に)。あなたの力の祕密は何でせう
？ 何んでもない、あなたは御自分を信じてゐるといふ

丈ぢやうです。あなたは誰だれのためにもなく、御自分ごじぶんのために戦たたかつて、征服せいふくをなすつたのです。あなたは御自分ごじぶんの運命うんめいに恐れおそはなさらぬ。勇氣ゆうきと意思いしとさへあれば誰だれにでもできると、わたくし達たちに教をしへて下くだすつた。それから(急に彼の前に膝づきながら)。わたくし達たちはみんなあなたを崇拜すうはいするやうになりました。(男の手に接吻する)。
 ナポオレオン(當惑げに)。と、と、奥様おくさま、どうぞお立たちなすつて下ください。

貴婦人きふじん。どうぞわたくしの敬禮けいらいをお受うけ下くださいまし。
 あなたの權利けんりです。あなたはフランスの皇帝くわうていになります。

すよ——

ナポオレオン(慌てて)。氣きを付けて。叛逆はんぎやくだ！

貴婦人(主張する)。ええ、フランスの皇帝くわうていよ。それからヨオロッパの皇帝くわうてい、いいえきつと世界せかいの皇帝くわうていかもしれない。わたくしはただ恭順きやうじゆんを誓ちかつた第一だいいちの臣民しんみんといふだけでございます。(再び手に接吻する)。我わが皇帝くわうてい陛下へいか！
 ナポオレオン(閉口して、女を立たせ)。さあ、もうどうぞ。

いやはやどうも、そんな馬鹿ばかげた。ねえ、もう落着おちついて、落着おちついて。(女をいたはり乍ら)。さあ、さあ、この娘こは。

貴婦人(嬉し涙に咽んで)。あなたの方がよつほどよくご存じのことをあつかましく申上げまして、もしやおおこななさりはしませんか。

ナポオレオン。おこる！なんの少しも。そんなことは少しもないねえ。あなたは利巧な、感情の鋭い、愉快な人だ。(女の頬を叩く)。友達にならうか。

貴婦人(狂喜して)。あなたのお友達に！わたくしをお友達にして下さるの？まあ！(両手を差出して晴々しい笑顔をみせる)。ねえ、わたくし信實を見せますわ。

ナポオレオン(眼を光らせて瘡癩聲に)。何んだと！

貴婦人。どうなすつたの？

ナポオレオン。信實を見せる！わたしの方でも御禮に信實を見せて秘密書類を甘く出しぬかれりやあ世話がな。ああ、ダリラ、ダリラ、お前はわたしを手品にかげようと言ふのだな。わたしを少尉同様な痴鈍と思つてゐるのだな。(脅す如く詰めよる)。さあ、早く秘密書類を。もう冗談をしてはゐられないのだ。

貴婦人(寢椅子のまわりをとびめぐつて)。

將軍——

ナポオレオン。早くしろといふに。(室の真中を飛上つて貴

婦人の葡萄園へゆかうとするのを遮る)。

貴婦人(進退谷つて男の正面にむき)。失禮な、何んといふ言ひ方です。

ナポオレオン。失禮だ！

貴婦人。失禮ですとも。そんな亂暴な物言ひをする、あなたは何です。野蠻な、下等な、コルシカの亂暴者氣質が直ぐ出てくる。

ナポオレオン(我を忘れて)。

何にを、この阿魔！(野蠻に)。

さあ、もう一遍言へ。その書類をよこすか、でなければ腕づくで——ふんだくるか？

貴婦人(手を落して)。

腕づくで——ふんだくる——(ナポ

オレオンが負嶮の猛虎といふ格好で睨めつけてゐると、女は殉道者のやうな姿で双手を胸に組む。この身振と姿勢は直ぐナポオレオンをしてその演劇的の本能を醒起せしめ、自分も一番芝居をして見せてやらうといふ氣になり、憤怒も何處かへ行つてしまつた。いい取組である。で、彼は一寸間を置いて急に顔を和げ、手を腰にやつて努めて冷靜を装ひ、女を見上げ見下し、次に嗅煙草を一掴み出して手をよく拭き、ハンカチを藏ふ。是に於いて彼女の颯爽たる英姿は一々滑稽になつてくる。

ナポオレオン(終に)。なあるほど？

貴婦人(少してれたが尙敬虔的に手を組んでゐる)。さあ、どうしようと言ふのです？

ナポオレオン。まあお樂におんななさい。

貴婦人。畜生！（姿勢をくつして寢椅子の角へ行き、手をうし
るに靠れかゝつてナポオレオンを見る。）

ナポオレオン。ああ、その方がよつぽど宜い。ところで
聞き給へ、わたしはあなたが好きだよ。そればかりぢ
やない。あなたの禮義正しいのを尊重するんだ。

貴婦人。それではあなたは御自分に持たないものを尊
重するんですね。

ナポオレオン。いやそれも今に覺えます。考へて見るが
いい！。わたしはあなたが婦人だから、美人だから、烈

女だから、なんだかだからといつて、恐れ入つて引込
むことができようか。私は感情的なことをならべて、
男の膂力と、あなたの持つてゐる自分の大事な手紙と
の間に立往生するより外に能の無い人間だらうか。そ
うして見すく獲物を前に控へ乍ら空手で退却して其
の意氣地なさ加減を隠すために寛大な英雄らしく装つ
てゐられるだらうか。それであなたは女心の奥底から
私を侮蔑しはしないだらうか。女にはそんな阿呆はな
い筈だ。どうだい、ボナパアルトも時局に會へば立つ
て時と場合で敢て女のやうな行動もとるのさ。解つた

かい？（貴婦人は黙って突立て懐中から紙包を出す。横面へ叩きつけてやらうといふ強い衝動も起つたが、彼女の善い育ちがそんな野蠻な行動を遮つて、唯顔を反けただけで叮嚀に手渡した。と、直ぐ室の向ふの方へ飛退いて、顔を手で掩ひ椅子の背に身體を向けて靠れかかった。）

ナポオレオン（手紙を注視して）。ああ、これで好し。これで好し。（開けて見る前に一寸女の方を見て。）勘忍したまへ。（女が顔をかくしてゐるのを見て）。大變怒つたやうだね、ええ？（紙包を開くと既に封印は破れてゐるから内容を調べやうと机の上に置く。）

貴婦人（靜かに手を下して、自分は泣いて居たのではない、考へゐたのだといふことを示す）。いいえ、あなたは悪くはないの。ですが、唯お氣の毒ですわ。
ナポオレオン（手紙を繰る手を止めて）。氣の毒だ！何故です？

貴婦人。あなたの名譽が失はれてゐるのが分かりかけたものですから。

ナポオレオン。ふむ！それ以上の悪いことがあらうか？
貴婦人。それからあなたの幸福も。

ナポオレオン。幸福なんといふものは私に取つては、世

の中で一番下らないものぢやないか。幸福なんといふことに構つてゐたら、今日のわたしになれただらうか？（紙包をとり上げる）。それからまだあるかい？

貴婦人。もうそれだけ——（ナポオレオンは満足した叫びを以て詞を遮る。女は静かにつづける）。あとはあなたがフランスの國で、大變馬鹿げた人物になるだらうといふ事だけです。

ナポオレオン（口早に）。何に？（手紙を取落す。貴婦人は静かな緘黙を以て謎のやうに男を見る。彼は手紙を投捨てて、いまいましさに）。おい、何をいふのだ？また手品をもち

出したな？此の手紙の中にあることを私は知らないと思つてゐるのか。言つて聽かせよう。第一がボオリュウの退軍に關する私の報告書だ。彼奴の取るべき道は二つしかない。あの薄鈍奴——マンツアに閉籠るか、ペシエラを取つてヴェニスの中立を犯すかだ。お前さんなんぞも古風な鈍馬な間牒の仲間だな。彼奴、裏切りされたことを知つて通信を杜絶させるために、危険を冒してお前さんを遣したのだ。——さうでもしたらわたしの手から、のがれられるとでも思つてゐるのか、馬鹿な！其外はバリエイから來たお前さんなんぞに分か

らない當前の通信だ。

貴婦人(迅速に實務的に)。

將軍、では恨みつこなしに分

けませう。どうか、あなたの間諜が、オオストリアの軍隊の事に關して送つてきた、通信をお取んなすつて、跡のバリーの手紙をわたくしに下さいまし、それで結構です。(冷靜な提議に呆れて息が塞がる)。

ナポオレオン。恨みつこなしに分け——(喘ぐ)。奥さん、

まるでそれではあなたの手から骨を折つて奪つた私の手紙を、自分の財産とでも思つてゐるやうだな。

貴婦人(熱心に)。

いいえ、決してあなたについた手紙

が欲しいのではないのです、——あなたのお書きなすつたのや、あなたに宛てて書いたのや、そんなものは欲しくない。ただ其の包の中に一つ盗んで来た手紙がある。或女が或男に——自分の夫でない男に送つた手紙なんです、不名譽な意味の手紙なんです——

ナポオレオン。色文だと言ふのか？。

貴婦人(苦甘いやうな調子で)。色文でなくつて、そんなに腹が立つ手紙があるでせうか？

ナポオレオン。何んだつてわたしの許へそんなものをよこしたのだ？その手紙でその女の亭主を、わたしの自

由にさせようとも言ふのかい？

貴婦人。いいえ、いいえ。あなたには何の用もないんですよ。わたくしが頂いてしまへばそれで済むものな
 んです。それを書いた婦人を傷けようといふ全くの悪
 意から、あなたに送つたまでなんです。

ナポオレオン。ぢやあ、なせ、その女の亭主の許へは届
 けないで、亭主でもないわたしに送つたのだ。

貴婦人。(急所をつかれて)。おお！(後退りして椅子に倒れる)。
 ああ、わたくしには分かりません。(へたへたとなる)。

ナポオレオン。ははあ、分かつた。この手紙を取戻さう

爲めに仕組んだ小説だな。(手紙をテーブルの上に投げて、皮
 肉な機嫌顔で女に面する)。えらい、わたしはあなたを讚
 美する。もしこの位に嘘が言へたら、私もこれでだい
 ぶ面倒が省けるんだが。

貴婦人(手を揉んで)。まあ、わたくしほんたうに嘘が言
 へたら、どんなにいいでせう！嘘だつたら信じて下さ
 るでせう。誰も信じてくれないのは眞實ばかりです。

ナポオレオン(従軍商人にでも對するやうに亂暴な打とけた調子
 で)。うまいぞ！うまいぞ！(兩手を背後のテーブルに突い
 て軀を伸ばし上げ、兩手を臂の下にかつて、股をうんと廣げる)。さあ、

私も話好きにかけちやあ全くのコルシカ人だ。その氣になればお前さんよりもちつと巧くやるぞ。この次もし、細君に關係した手紙をなせ夫のところへやらないかときくものがあつたら、それは夫がそんなものを見たいと思はないからだといふがいい。お前さんは男といふものは、世間の評判に迫られて、騒動を始めたり、決闘をしたり、家庭を破壊したり、疑獄を起こして一生を誤まつたりなんぞしたがるものだとか考へてゐるのかい、氣を付けて何事も知るまいとすれば、それで済む事ぢやないか。

貴婦人(反抗的に)。その包の中に、あなたの奥様に關係した手紙があつたとしたらどう？

ナポオレオン(機嫌を損じて、テエブルを離れる)。失敬ぢやありませんか、奥さん。

貴婦人(恭しく)。御免下さいまし。シイザアの妻は疑惑以上のものでしたね。

ナポオレオン(徐々に勿體らしい様子を作り)。あなたは憤しみが足りなかつた、許してあげる。これからはあなたの小説の中へ、ほんたうの人間を引合に出すことはお止めなさい。

貴婦人(テエブルの方へ行かうとして立上る)。將軍、ほんたうに或婦人の手紙がそこにございますよ。(包を指す)。それをわたくしに下さいまし。

ナポオレオン(野獸的な敏捷を以て、手紙に近寄らせないやうにして)。何にを?

貴婦人。その方は昔のお友達で、一つ學校にいらしたんですの。その方から、手紙があなたのお手に、渡らないやうにしてくれと頼んでよこしましたの。

ナポオレオン。何故その手紙がわたしの許へ来たのだ?

貴婦人。督政官バラアに關係した手紙なのです。

ナポオレオン。(眉をよせる。驚いた様子)。バラア!(傲然と)。お氣を付けなさい、奥さん。督政官バラアはわたしの親友ですよ。

貴婦人(すました顔で肯いて)。ええ、あなたの奥様の手蔓でお友達になつたのねえ。

ナポオレオン。又か! 妻に關したことを言つてはならんといふに。(貴婦人は叱られたのは何んとも思はず、好奇の眼をして男を見る。彼の瘡癩は次第に昂ると共に、傲慢な態度をいつまでも保つてゐられなくなり、疑はしげに聲を低めて云ふ)。あなたがそんなに同情してゐる婦人といふのは、一體誰だ

ね。

貴婦人。まあ、あなた！そんな事が言へるでせうか？

ナポオレオン（不機嫌になつてまた彼方此方を歩きまわる）。いい、いい、お互ひにかばひあつてゐる。女なんてものはどれもこれも同様だ。

貴婦人（腹立しげに）。私達だつてあなた方のやうに決して同様ではございませんよ。わたくしがもし外の男を可哀がるとしても、私はやはり自分の夫をも愛してゐるやうに見せかけるとお思ひですか、夫は元より世間に向つても、其の事を知られるのを怖がるとお思ひで

すか？ところがその婦人はそんな人ではないのです。男を騙欺して従へてしまふのです。（侮蔑を以て）。ところが殿方はそれが好きで、女に勝手なまねをされてゐるのですね。（背を向けてまた腰を下す）。

ナポオレオン（女には構はず）。バラア、バラア！（顔を曇らせて女を脅かすやうに向き返る）。おい、氣をおつけ、ええ？言ひすぎるやうだ。

貴婦人（無邪氣らしく男に顔を向けて）。何んでございますつて？

ナポオレオン。何んのことを言つてゐるのだ？一體誰だ

い、その婦人といふのは？

貴婦人（軽く右の手を椅子の背中に乗せ、膝を重ねて男を見上げた時に、すまして知らぬ顔を作り乍ら、探すやうな怖い男の眼と出會す）。或る見得坊な、馬鹿な、派手好きな女なの。その御亭主といふのは才子で、野心家で、自分の奥さんが年や、財産や、身分や、何でも馬鹿な女のいひさうな嘘を言つて嫁に來たことも十分分かつてゐるくせに、一つの主義でも一人の男でも忠實に守ることのできな女だといふことまで分つてゐるくせにそれでもやはり奥様が可哀くつてならない。——といふのがつまり、

バラアの縁で出世させて貰うためなの、女房を利用する亭主の本能がやめられないためなの。

ナポオレオン（ぬすむやうな、冷刻な猛しい低聲で）。牝猫め！
それが手紙をとられた意趣返しか。

貴婦人。馬鹿々々しい！それともあなたが、さういふ風な亭主だと仰しやるんですか。

ナポオレオン（憤激して背中で掌を握り、指を慄はせ、いらくし乍ら女をはなれて暖爐の方へ飛びのき乍ら）。この女は俺を發狂させる。（女に）。行つてしまへ！

貴婦人（泰然不動）。その手紙を頂戴しませんでは。

ナポオレオン。行けと言ふに。(暖爐から葡萄園の方へ歩いて行き、またテエアルの方へ戻る)。手紙なんぞを渡すものか。貴様は嫌だ。悪魔のやうな醜い、厭ふべき女だ。變な女にいつまで俺は崇られてゐるのだ。出て行つてくれ。(女に背中を向ける。女は靜かに頬杖をつき乍ら面白くなつて笑ひだす。男は振り返りぶりくして女の眞似をする)。は、は、はだ！何にがおかしい？

貴婦人。將軍あなたがですよ。わたくしはよく男の人がすねて小兒のやうな眞似をするのは見たことがありますけれど、ほんたうのえらい人がするのは初めて見

ましたもの。

ナポオレオン(野獸的に、女の面に叩き付けるやうに)。馬鹿、諛辭だ！諛辭だ！下等な無禮な諛辭だ！

貴婦人(頬を眞赤にして起ち上る)。まあ亂暴なことを。その手紙をしまつておいて、ゆつくり中に書いてある御自分の耻を讀んで御覽なさるが好い。きつとためになることがあるでせうよ。さようなら。(憤然として奥の方へゆく)。

ナポオレオン。自分の耻——まあ待て、待てと言ふのに！(女は高慢な様子で、男の亂暴な強迫の言葉にはかまはずに扉口

の方へゆく、男は駈けよつて、女の腰を押へて引戻す。さあ、どういふ譯だ。譯を話せ。え、譯を話せといふに。でなきや——（脅かす、女は嫌忌の眼を以て見上げる）。うむ、む！強情な奴だ。なせ穩かな問に答へられんのだ。

貴婦人（亂暴を深く憤つて）。なんでわたくしにお訊ねなさるの、その答は御自身が持つてゐらつしやるのですわ。

ナポオレオン。どこに？

貴婦人（卓上の手紙を指す）。そこに。まあ、それを讀んでごらんなさい。（ナポオレオンは包を取上げて躊躇して、また投出す）。

ナポオレオン。あなたは昔のお友達とかの名譽をかばふことを忘れたやうだね。

貴婦人。あの人はもう何んにも氣づかひなことはないんです。あの人は夫がどういふ人だといふことをよく知らないのですから。

ナポオレオン。ちやあ、いよいよその手紙を讀まなくてはならないかね？（また手を出して手紙をとらうとして女の顔を見る）。

貴婦人。今さらよむまいといつてもよまずにはゐられません。まあ、そんなに怖が

ることはありませんわ、きつと面白いことがありませうよ。

ナポオレオン。面白いこととは、譬へば――。

貴婦人。譬へば、バラアさんとの………決闘とか、夫婦喧嘩とか、離婚騒動とか、疑獄事件とか、官途の沈滞とか、まあさう言つたものです。

ナポオレオン。ふむ！（手紙を取上げて、唇を締め乍ら、手紙を掌にのせて、彼女の顔と見比べてゐたが、やがてこれを左の手にうつし、脊中にかくして、右の手を舉げて頭のうしろを掻き乍ら、葡萄園の端へ行き、葡萄を眺めながら暫くじつと考へてゐる。婦人は黙

つていくらか馬鹿にしたやうに男を見守つてゐる。突然男は戻つてきて力の入つた決心した調子で。奥さん、あなたの要求を容れよう。あなたの勇氣と決心とは立派に成功しました。好く戦つた報酬として手紙をお取んなさい。それからこののちも、卑しい、野蠻なコルシカの亂暴者は、前に敵の面前に於て毅然たるが如く、戦終つたのちにも、敗者に對して、かく寛大であると言ふことを記憶してゐて下さい。（包を差出す）。

貴婦人（受け取らうとも爲ないで、男の顔をじつと見てゐる）。やおや、どうなすつたの？（男は劇しく包を床に叩きつけ

る。あら、折角ちかくでしたのに、とんだ失禮しつれいを。(少し人を馬鹿にしたやうに、丁寧な禮をする)。

ナポオレオン(また包を引つさらつて)。手紙てがみを持つて出で行つてもらふわけには行きませんか？(傍へ詰めよつて無理に包を押し付ける)。

貴婦人(テエプルを廻つて逃げ乍ら)。いいえ、もうあなたの手紙てがみは欲ほしくはありません。

ナポオレオン。十分前おんまへまでは、この世よの中の望のぞみは外ほかにな
いやうだつたではないか？

貴婦人(用心してテエプルを間に置くやうにして)。十分前おんまへま

では、あなたもわたくしに、とても辛抱しんぼうがならないやうな失禮しつれいはなさいませんでした。

ナポオレオン。わたしが——(怒を呑み乍ら)わたしが悪わるかつた。

貴婦人(冷かに)。どういたしまして。(ナポオレオンはわざと丁寧にテエプル越しに手紙を差出す、彼女はそれの届かない所まで退つて)。でもあなたは、オオスタリア軍ぐんがマンツアにゐるか、ペシエラにゐるか、知りたいのではございませんの？

ナポオレオン。奥おくさん、わたしは間諜かんていの助けを借からんで

も戦に勝てると言つたではありませんか。

貴婦人。ではその手紙は！お読みなさりたくはないの？

ナポオレオン。あなたはわたしの宛名ではないと言つた
でせう。わたしはまだ習慣として他人の手紙を読むだ
ことはありませんから。(また包を差出す)。

貴婦人。さういふことでしたら、その御習慣を破つて
頂かうとは申しません。わたくしはただ、あなたがそ
れを読む邪魔をしたかつたのです。(面白さうに)。將軍、
さようなら。御機嫌よう。(冷かに奥の扉の方へ向ふ)。

ナポオレオン(憤激して荒く包を寐椅子の上に叩き付ける)。も
う堪忍がならん！(決然と立ち上つて扉の前に立はだかる)。
あなたは一身の危害といふことを知つてゐるか？それ
ともあなたも、斑になる程叩かれて見たいといふ女の
仲間か。

貴婦人。御親切さま。感覺といふものはいづれ肉感的
なものなんでせうね。けれど、わたくしはまあ厭です。
わたくしは唯家へかへりたい、それだけでございます。
わたくしはあなたの秘密書類を盗むなんて随分悪黨で
すわねえ、けれど、それももうあなたのお手に戻つた

し、そしてあなたはわたくしを許して下すつたのです。何故といつて（ナポオレオンの修辭を巧みに反覆して）。あなたは、前に敵の面前で毅然としていらしたやうに、戦の終つた後にも敗者に對して寛大でいらつしやるんですものねえ。ではお別れをいたしませうね？（しとやかに手を差出す）。

ナポオレオン。（憤怒の凝固つた身振で前路を遮り、扉を明けて荒荒しく呼ぶ）。ジュウゼッペ！（尙高く）。ジュウゼッペ！（戸を荒く閉ぢて室の中央へ来る。貴婦人は男を避けて稍や葡萄園の方へ寄る）。

亭主（扉口に現はれる）。閣下？
ナポオレオン。あの馬鹿はどうした？

亭主。お吩咐の通り澤山差上げましてな、只今は暇潰しに、私共と賭事をなすつていらつしやる所です。

ナポオレオン。呼びにやれ、此處へ引張つて來い。お前連れて來い。（亭主はかしこまつて急いで去る。ナポオレオンは貴婦人に向つて簡単に）。奥さん、暫らく待つて頂きたい。（寢椅子の方へ寄る。婦人は葡萄園から出て來て食器棚の前に立つて凭掛り男の様子を見てゐる。ナポオレオンは寢椅子から包を取つて、注意深く胸のポケットに入れてポタレをかける）。

直に其の意味が解るが解つたら厭だらうと言つた風で、女の方を眺めながらやつてゐる。それから沈黙が続く。やがて少尉が亭主に伴はれてくる。亭主は恭しくテエアルの傍に立つ。少尉は貴婦人の立つてゐる方へ行く。劔も帽も手袋も無いが食後の大元氣でナポオレオンの言葉を待つてゐる。

ナポオレオン。少尉。この婦人からもつと澤山の報告を得ようとしたがどうもだめだ。然し君を欺した男は、どうしても此の婦人の弟のやうだ。

少尉(得意氣に)。それ御覽なさい閣下、わたくしが言つた通りでせう！

ナポオレオン。君は其男を探し出さねばならん。君の名

譽のためだ。軍隊の死活、フランスの運命、ヨオロツバの運命、人道の運命までも、其の秘密書類の中にある報告に掛つてをるといつていいのだ。

少尉。さうです。なか／＼重大なものらしく思はれます。(まるで前にはそんなことを思はなかつたやうである)。

ナポオレオン(力を入れて)。非常に重大なものだ。若し君がそれを取り戻さん場合には、聯隊の面前で君の位置を褫奪する。

少尉。ヒユウ！聯隊はさういふ事を好まんでせう、ま

ナポオレオン。わたし一人としては氣の毒だと思ふ。出来ることならわたしも内々で済ましたいのだが、その報告に由つて行動しなかつた責任を問はれた場合に、わたしは世間に向つて秘密書類を受取らなかつたと言はなければならん、さうなつたら君はどうなるか。氣の毒だがどうも止むを得ん。

少尉(好人物らしく)。どうも有りがたうわたしのことはお案じなさるに及びません。わたくしのことは御心配には及びません、どうにかかうにかごまかしますよ。報告があらうとあるまいと、吾々は閣下のためにオオ

ストリア軍を撃退してみせます。まあ急かないで下さい。鴨を追つかけるやうに野郎の跡を追つかけると追き立てられても、一體何を手掛りに探したものだらう。亭主(恭しく)。少尉さん、お忘れになりましたか、其奴はあなた様のお馬に乗つて居るでせう。

少尉(愕として)。忘れてゐた。(決然と)。閣下、きつと追跡します、あの馬がイタリアの何所かに生きてをれば、必ず見附けて参ります、秘密書類も忘れずに。どうか御心配なく。亭主。俺が劔や帽子を取つてくる間に、お前、あのここの家の疥癬馬をどれか一匹、鞍を付け

ておけ。早くしろ。早くしろ。(追きたてる)。

亭主。只今、只今。(亭主急いで葡萄園へ去る。園は今や落日に紅く彩られてゐる)。

少尉(奥の室へ這入らうとして四邊を見廻し乍ら)。

閣下序

に伺ひますが、私は、劔を差上げて行きましたらうか。ああ、さうだつた。(憤々して)。人を捕縛するなんて馬鹿げたまねをするからだ。何處にあるんだか——(獨言を言ひ乍ら室を去る)。

貴婦人(まだ食器棚のところに立つてゐる)。 どうしたといふんですの、あなた？

ナポオレオン。 彼奴はお前さんの弟を探しに行つた。見付かるまい。

貴婦人。 無論ですわ。そんな人間はありやしませんもの。

ナポオレオン。 秘密書類はとう／＼失くなつてしまつたのか。

貴婦人。 飛んでもないことを、あなたの上衣の内にございますわ。

ナポオレオン。 まあ、あなたはあの馬鹿々々しい言草の證據をほんたうに見せるのは、なか／＼むづかしいこ

とだらうな。(婦人ぎつくりとする、男は意地わるく語氣に力を入れて)。その書類は失くなつてしまつたのだ。

貴婦人(心配さうにテエアルの隅までゆく)。さうして、あの仕合せの悪い若者の一生は犠牲にせられたのでせうか？

ナポオレオン。彼の男の一生だ！あんな野郎、撃ち殺しても彈藥の方が損な位なものだ。(侮蔑的に爐の側へ行き婦人に背を向けて立つ)。

貴婦人(思索するやうに)。ひどい方ね。男だつて女だつてあなたにはほんの道具なんぞでせう、毀れるまで使はれ

るのねえ。

ナポオレオン(彼女の方を向いて)。あの野郎を毀したのは、あなただらうか私だらうか？秘密書類を騙して取つたのは誰だらう？それでゐてあなたはあの男の身の上を案じるのですか。

貴婦人(無邪氣に少尉の身を心配して)。まあ、わたくしそんなことにならうとは思はなかつたのですわ。でも、さうしなくつてはどうしても手紙が、手に入らなかつたのですもの。少し残酷だと思つたけれど。(哀願するやうに) 將軍どうかあの方を不名譽から救つて上げて下さ

いまし。

ナポオレオン(苦笑して)。あなたはお利巧なんだから、自分で助けておやんなさい。あいつをしくじらせたのはあなたなのだ。(野蠻な強い調子で)。私は悪い軍人は大嫌ひだ。(彼は決然として葡萄園を通つて出てゆく。彼女は跡から嘆願するやうな態度で二三歩ゆきかけたが、そこへ少尉が戻つてきた。少尉は帽子を冠り、手袋をはめ、劍をつけて、馬に乗りばかりの身仕度で、室を横ぎつて外の扉へ行かうとするのを婦人が遮り止める)。

貴婦人。少尉。

少尉(鹿爪らしく)。邪魔をしちやいかん。ねえ。奥さん、勤務だ、勤務だ。

貴婦人(哀願するやうに)。少尉さん、まあ、わたくしの可哀い弟をどうしようとなさるの。

少尉。そんなにあの男が可哀いのかい？

貴婦人。もしもの事があつたら、わたくし死にますわ。助けてやつて下さいな。(少尉、黯然として頭を振る)。いいえ、いいえ、きつと助けて下さい。ねえ。殺す法はないわ。まあおききなさいよ。若しかあたしが弟の居所を教へてあげたら、さうして、あなたが捕縛して將軍

の前へ出させるやうにしてあげたら、あなたはもう決して弟と闘つたり、手荒いことをしないようにね、軍人として、紳士としてのあなたの名譽にかけて約束するでせう、ねえ？

少尉。だが彼奴の方から攻めてくるかもしれない。彼奴は俺のピストルを持つてゐるのだからな。

貴婦人。どうして、大變な臆病者なんですもの。

少尉。なかくさうでないで。彼奴何んでもできるのだ。

貴婦人。萬一、そんなに抵抗するやうなことがあつた

ら、約束は取消しませう。

少尉。約束だ？俺は約束なんぞするものか。おい、おい。いけないぞ、お前も俺の性質の善良な方面に附け込まうとするのだな？俺の馬はどうしてくれる？

貴婦人。そりやあ、馬とピストルを取戻す事は、取引の中に入つてゐるんですわ。

少尉。名譽にかけて？

貴婦人。ええ、名譽にかけて。(手を差出す)。

少尉(手を握りつつ)。よし、よし。わたしはあの男に對して羊のやうに穩かにやらうよ。彼奴の姉さんは可哀

い女をんなだな。(接吻しようとする)。

貴婦人(それをすりぬけて)。あら、忘れたんですか、少尉せうぶさん。あなたの地位ちゐがあぶない所ところですよ。——ヨオロツバの運命うんめいも、——人道じんたうの運命うんめいも——。

少尉。へむ、人道じんたうの運命うんめいなんか糞くそを喰くらへだ。(女を追つかける)。
ちよいとで好いんだから。

貴婦人(テエブルを周つて逃げる)。あなたが軍人ぐんじんの名譽めいよを回復くわいふくするまでは嫌いややですよ。考かんがへてごらんさい、まだ弟あとうとも捕つかまえないのに。

少尉(誘惑的に)、何所どこに居ゐるか教おしてくれるかい、ええ？

貴婦人。一ひとつ合圖あしづをすれば、十五分ふん経たないうちに來きてよ。

少尉。ちやあ、そんなに近所きんじよなのか。

貴婦人。ええ、すぐ傍そばよ。待まちつてゐらつしやい、あたしが使つかひをやれば、すぐに飛とんできて、降参かうさんしますよ。
あなた、分わかつて？

少尉(頭が悪いのでよく分らず)。少し錯雜さくざいつてゐるな。が、まあいいだらう。

貴婦人。それで今いまの中うち、あなた、待まちつてゐる間あひだに、將しやう軍ぐんと條約じょうやくを結むすんだらどう？

少尉。さあいよく話が錯雑かつて来たぞ。條約つて、何んだい？

貴婦人。もしあの男を捕えてきたなら、軍人としての名譽を雪いだものと思つて下さいといつて約束するの。さういふ條件なら大將は何んでも約束するわ。

少尉。悪くないな。有難い、やつてみよう。

貴婦人。おやんなさいよ。それには何よりあなたの利巧な所を見られないようにするんですよ。

少尉。分かつた。彼奴嫉妬やきだからな。

貴婦人。それから、餘計なことは言はずに、ただあな

たが、わたしの弟を必ず捕へる、捕へなかつたら生きて返らん、とそれだけ言ふの、大將は信じないでせう。所へ弟を出す――

少尉(計策が分つたので口を入れる)。そして大將の鼻を明かせるか！えらい、仲々利巧な女だなあ！(叫ぶ)。ジュウゼツッペ！

貴婦人。しいつ！ジュウゼツッペに知らせてはだめよ。(唇に指をあてる。少尉も同じやうにして互に氣をつけるといふ顔で見合ふ。それから貴婦人は有頂天な笑顔になつて、少尉にキスするやうな姿勢を見せ、其のまゝ奥の扉を通つてかけ出る。少尉は電氣でくすぐれたやうに堪へきれなく笑ひ出す。ジュウゼツ

へが表の扉から戻つてくる。)

亭主。少尉さん、馬の用意ができました。

少尉。俺はまだ出かけない。大將を呼んで来てくれ。

話しがあるからつて。

亭主(首を振る。)

少尉さん、そいつあいけないや。

少尉。何故いけない。

亭主。この悪い世の中では、大將が少尉を呼び寄せようとも、少尉が大將を呼び寄せるといふ法はありません。

少尉。なるほど、さうだらうな。どうも共和政體にな

つてから、物事がいやに七つ堅くなつた。

(ナポオレオン葡萄園から再び出て来る。胸のボタンをかけ色の着い風托鉢をしてゐる。)

亭主(ナポオレオンの来たのを知らずに)。その通り、その通り。今ちやあフランスの人達は、つまりみんな宿屋の亭主みたいなものさ。あなた方は誰にでも丁寧にしなればなりませんよ。

ナポオレオン(亭主の肩を叩き)。だから丁寧の値打がすつかり下つてしまつたのだ、なあ？

少尉。ああ、ちやうどいい所だ。さあ、大將閣下、い

よいよ捕まりさうですよ。

ナポオレオン(皮肉らしく改まつて)。いや、君には捕まりま
すまい。

少尉。おや！閣下はさうお考へですか、まあごらんな
さい。まあ、わたくしが彼奴を捕へてあなたに引渡し
たら、あなたは免すつて仰しやるでせう？わたくしを
聯隊の前へ引出して、耻しめるやうな事はお止めにな
るでせうな？なに、わたくしはどうしても構はんです、
たださういふ事でわたくしの聯隊が、他の聯隊の笑ひ
ものになる事は好まんですからなあ。

ナポオレオン(冷たいユウモアの光が蒼白い陰鬱な顔色の上に浮
ぶ)。亭主、この士官をどうすればいいだらう。この男
のいふ事は何にから何にまで間違つてゐるのだ。

亭主(素早く)。大將にしてお上げなさい、さうすりやこ
の方の仰しやる事が、一々有理に聞こえますよ。

少尉(歡呼して)。それ〜！(夢中になつて寢椅子の上に身を
投げかけ、この冗談を面白がる)。

ナポオレオン(笑つて亭主の耳を摘み乍ら)。ジュウゼツペ、貴
様はこの宿屋に燻り込んでゐるのは惜しい。(椅子に腰
を下し、小學校の先生が生徒に向ふやうに自分の前に亭主を立た

せ)。俺は貴様を連れて行つて立派な人間にしてやる。亭主(急いで續け様に頭を振り乍ら)。もうどうか、閣下、折角ですが御免を蒙りませう。これまでもいろんな人がわたくしを立派な人間にしたがつて騒ぎました。子供の時分にや、和尚さんが読み書きを教へて人間にしてやるといふし、その次にはメレニヤノのオルガン弾きが、譜を読む事を教へて人間にしてやるといひました。補充の軍曹はわたくしにもう二三寸背があつたら、人間にしてやるといひました。併しさういふ事は、いつでもつまりわたくしに働けといふ事なのです。わたし

くしは、ありがたい事には、それにや惰け者です。そこでわたくしは自分で料理を習つて、宿屋の亭主になりました。只今では召使に仕事をさせまして、手前はただお喋りを致す計り、外には仕事もございませぬ、これが何により手前の性に合ふやうでございます。ナポオレオン(考深く亭主を見て)。貴様、それで満足か？ 亭主(愉快らしき自信を以て)。大満足。ナポオレオン。すると貴様の胸の中には活動と勝利に渴へて、夜も晝も、貴様の脳漿と身體の汗を絞り取らうとする、悪魔が宿つてはゐないかな。右の手には王冠

左の手には船頭の擡、地球上の王國を、残らず眼の前に並べて、その國民の奴隸になるのを條件に、その王國の主人にしてやらうと勤める——さういふ悪魔は宿つてはゐないな？

亭主。どう致しましてそんなものは、氣もない事でございませう！それどころか閣下、手前の腹に宿つてをります悪魔は、もつとずつと性の悪い奴でございませう。王冠も王國も捧げる所ではございませぬ。腸詰、オムレツ、葡萄、乾酪、葡萄酒——何といふ事なく無代で貰はうとする奴でございませう。それも日に三度、それ

より少かつたら、決して承知は致しません。

少尉。おい、亭主、もうよせよ。そんな事をいふ者だから、また腹が空つて来た。

(亭主は陳謝的に肩を聳かして、會話から退却する。而してテエアルを拭いて地圖を眞直にし、貴婦人が後へ推しやつたナポオレオンの椅子を元へ直す。)

ナポオレオン(少尉の方を振向き冷笑的の慇懃を以て)。わたしが今のやうな話をしたからといつて、君は野心を起こしはしまいな。

少尉。どう致しまして、わたくしはそんな望は起しま

せん。それにわたくしは今のままがよつぽど宜しい。わたくしのやうな人間は只今の所、軍隊で最も需要が多いのです。といふのは、大革命は普通の人民に向つては、この上なしであつたらうが、軍隊に向つては何の役にも立たなかつたのです。閣下、兵士といふものはどういふものだか、御承知でありますか。彼等は家柄の者を將校に頂きたがるものであります。下士官は兵士と親密のものでありますから、どうしても紳士でなくてはならんのです。併し乍ら將官とか、乃至佐官なんといふものは、商賣さへよく心得て居れば、どん

な穢多でも乞食でも構つた事はないのです。少尉は紳士であります、その他は皆偶然であります。へむ、一體誰がロデイの戦鬪の勝利者だと考へますか？ 申しませう、あれは私の馬のおかげでした。

ナポオレオン（立上り乍ら）。また馬鹿が、飛んでもない事を言ひ出した。氣を付けろ。

少尉。どうしてそんな事はないです。閣下は昨日河の上に漲つた凄まじい眞赤な砲火を記憶しておるでせう、オオストリア軍は閣下の渡河を妨げようとするし、閣下は橋に火をかけさせまいと苦心せられました。あ

の當時、わたくしは何處に居つたか、閣下は御氣付でしたか。

ナポオレオン(威嚇的に可重な語氣で)。さあ、残念でした。多分その時わたくしは仕事に掛つてゐたでせう。

亭主(敬慕に耐へざる如く)。あの時あなた様は、馬から飛び下りて、御自分に大砲をお放しなされたとやら申しますが。

少尉。それは間違つてゐるよ。將校たるものが下士卒に身を落すなんといふ事があるものか。(ナポオレオン、不穩の面持で少尉を見あちらこちらと虎のやうに歩き廻る)。併し、

吾々騎兵隊の者が早く淺瀬を發見して、徒渉してポオリュウ老人の側面を打たなかつたならば、閣下はいつまでもオオストリア軍に砲撃をしかけて居られたかも知れなかつたのです。閣下は吾々が對岸に在る事を發見せられなかつたなら、多分橋梁を攻撃せよといふ命令は發せられなかつたでせう。従つてわたくしはあの淺瀬を發見したものが、ロデーの戰鬥の勝者であると申すのです。さあ、所で誰がこれを發見したでせう? 私は徒渉した第一人者でありました。即ち淺瀬を發見したのは私の馬でした。(確信を帯びて寢椅子から立上る)。

その馬こそは眞正なるオオストリア人の征服者であります。

ナポオレオン(熱くなつて)。馬鹿、貴様！俺は祕密書類を失つた罪に依つて、貴様を銃殺すればよかつた。貴様を大砲の口にのせて、吹きとばしてやればよかつた。さうでもしなければ、とても貴様を懲りさせる事は出来んのだ。(咬み付くやうに)。きこえたか？分かつたか？(二人のフランス將校、鞘の儘劍を手に捧げ、誰も知らぬ間に室へ這入つてくる)。

少尉、ひるます。閣下、若しも私が彼奴を捕虜にせぬ時

はですよ。え、若しもですよ。覚えて居て下さい。

ナポオレオン。若しもだ！若しもだ！たはけめ！そんな人間は何處にも居らぬわ。

士官(突如として二人の間に割つて入り、紛ふ方なき先刻の妙な貴婦人の聲音で)。少尉、捕虜になりますよ。(佩劍を差出す。一同仰天、ナポオレオンは暫時、電光に打たれたやうに女を凝視する。それから彼女の腕首を捉まへて荒々しく自分の手許へ引寄せ、仔細に猛しい眼をしてその同一人物である事を明白にすべく眺めてゐる。それといふのが丁度其時、戸外は速かに夜の色に變つて行つて、葡萄畑の彼方の殘照が清亮な星夜の光に壓されんとしつゝあるからである)。

ナポオレオン。馬鹿な！（厭惡の叫びをあげて女の手を振放し、胸に手を當て、肩を引込めたまま背中を向けてゐる）。

少尉（佩劍を受取り得意らしく）。そんな人間は居らぬ？ どうです閣下？（貴婦人に向ひ）。

貴婦人。ちやんとボルゲットオで、あなたを待つてゐますよ。

ナポオレオン（彼等の方をふりむき）。秘密書類はどうした？

貴婦人。とても見當はつきましますまい。とても有りさうにも思はれない所にあるんですものねえ。あなた方お二人の中どなたか、ここで私の姉にお逢ひでしたか？

少尉。ああ。非常な美人だ。不思議な程、お前とよく似て居る。勿論、容貌はずつと上だ。

貴婦人（神秘らしく）。へえ、でもあなたは、あの女が魔法遣ひだといふ事を御存じですか？

亭主（恐怖してみんなの傍へ駆け寄り、十字を切る）。おつと、

と、とんでもない。かりにもそんな冗談をいふ者ぢやありませんよ。ここの家ではさういふ事は禁物ですよ。

少尉。さうだ、止せ、止せ、君はもう捕虜だせ。勿論俺はさういふくだらん話は信せんのだ。それにしても冗談がすぎるぞ。

貴婦人。でも全くまじめなのです。姉は大將閣下に魔法を掛けたのです。(亭主と少尉は氣味悪げにナポオレオンの傍を飛退く)。將軍、上衣を開けてごらんなさい。その下に書類が這入つてゐますから。(手早くナポオレオンの懐の中へ手を突込む)。ほら、これだ、手に觸ります。ねえ？(男の顔を半分甘つたれるやうな、半分冷嘲かすやうな風で見上げる)。將軍、ごめんなさいな？(上衣の胸を開けんとする如く、鈕に手をかけて中止して、允許の下るを待つてゐる)。
 ナポオレオン(煙に巻かれて)。開けられるなら。
 貴婦人。有難うございます。(上衣を開けて書類を取出す)。

ほうらら！(書類を見せ乍ら亭主に)。ねえ！
 亭主(表の扉口まで飛出し)。やれ〜、神さま！あの人達は誑されてをります！
 貴婦人(少尉に)。さあ、少尉、あなた、恐くはないでせうねえ。
 少尉(後退りして)。ほつとけよ。(佩劍のつかを握り)。ほつとけといふに。
 貴婦人(ナポオレオンに)。將軍、これはあなたのですからお納め下さい。
 亭主。閣下、そんなものに手をつけてはいけません、

ほつてお置きなさい。

少尉。閣下、御注意なさい、御注意なさい。

亭主。焼いておしまいなさい。それからあの魔法遣ひの女も焼いておしまひなさい。

貴婦人(ナポオレオンに)。焼いてしまいませうか？

ナポオレオン(考へ乍ら)。さう、焼いて終へ。亭主、あつちへ行つて燈火をもつて来い。

亭主(アールく震へて訥り乍ら)。あなた、わたくし一人で行くと仰しやるんですか——この暗闇に——家の中には魔法使の女があるといふのに？

ナポオレオン。チョツ！意氣地のない奴だな！（少尉に）。

少尉、御苦勞だが、君とつて来てくれ。

少尉(抗議して)。いや、それは困りますな。ねえ、さうでせう。ロディの戦役では臆病者と、誰にも言はせなかつたが、併し、たつた一人でこの暗闇に燈火もつけず、しかも今のやうな氣味の悪い話をした跡で、行けといふのはあんまりです。いつそ、あなた御自身でとつてゐらつしたらいいでせう？

ナポオレオン(熱々として)。貴様、わたしの命令を拒むか？

少尉(決然と)。はい、拒みます。道理に反いてゐますか

らなあ。併しわたくしにも爲様があります。若し亭主
 が行くなら、一所に行つて保護してやりませう。
 ナポオレオン(亭主に)。どうだ、それでいいか？ 行け、二
 人一所に。

亭主(唇を震はせ乍ら恭しく)。か、畏りました。(厭々奥の
 室の方へ行く)。神よ守らせ給へ！(少尉に)。少尉さん、お
 先へ行らつしやい。

少尉。お前が先へ行く方がいい、俺は道を知らんから。
 亭主。間違ひつこはありませんよ。それに。(哀求する如
 く、自分の手を少尉の袖にのせ)。わたしはたかが宿屋風情で

ございますが、あなたは立派な家柄のお方ですもの。
 少尉。それもさうだな。ほら、さうびくくする事は
 ないわ。俺の腕にすがれ。亭主言の如くする。さうだ、
 さうだ。(二人はつながつて出て行く。もう外は星月夜だ。貴
 婦人は書類の包をテエブルの上へ放り出し、寝椅子の上に樂々と
 掛け、女袴を脱いで自由の感じを楽しんでゐる)。

貴婦人。どう、ひどい目に逢つたでせう。

ナポオレオン(歩き廻り)。あなたは温良しくない——女ら
 しくないといふ批難はある。あなたは、その着てゐる
 服を、本式だと思つてゐますか。

貴婦人。だつてあなたの召していらつしやるものと、大抵似てゐるやうではございませんか。

ナポオレオン。馬鹿な！あなたのおかげで、わたしが赤面してしまひますよ。

貴婦人(おぼこらしく)。ええ、軍人つてものは直き顔を赤くするものねえ！(ナポオレオン唸つて横を向く。女は書類を手の上で玩弄品にし乍ら意地悪く顔を見る)。將軍、あなたはこの手紙を焼いて了ふ前に、読んでごらんなさり度はありませんか？きつと死ぬ程見たいんでせう。ちよいとこのぞいて御覽なさいよ。(包をテエブルの上へ放り出

し横を向いてゐる)。わたくし、見ませんかから。

ナポオレオン。奥さん、わたしは何の好奇心もありませんよ。併しあなたは焼き乍ら讀まうといふ腹らしいから、勝手にお讀みなさい。

貴婦人。まあ、わたくしはもう、とつくに讀んで了ひました。

ナポオレオン(愕として)。何んですつて！

貴婦人。わたくしはあの少尉先生の馬を拜借して逃出してから、直ぐに讀んで見ましたの。ですからこの中に、何にか書いてあるか、わたくしはよく存じて居

りますよ、あなたは御存じがなくなつても。
 ナポオレオン。御免なさい、わたしも十分前、葡萄園へ
 出た時に読みました。

貴婦人。まあ！（飛び上つて）。まあ、將軍、やはりわたしはあなたをすつかり負かした譯ではありませんのね。わたくしほんたうにあなたを崇拜しますよ。（ナポオレオン笑つて女の頬を叩く）。今度こそほんたうに心からわたくし、あなたに降参しましたよ。（男の手に接吻する）。
 ナポオレオン（素早く手を引込み）。ブルル！そんな事は止めだ。もう魔法は止めて貰はう！

貴婦人。わたくし、少し申上げたい事があるんですけど——ただ誤解なさるといけないから。

ナポオレオン。そんな事で止すには及ばん。

貴婦人。では、かうですわ。わたくしは卑劣で利己主義なまねを、平氣でする方を、崇拜するといふ事なの。ナポオレオン（憤然）。わたしは卑劣でも利己主義でもないです。

貴婦人。まあ、あなたは御自分で御自分が分らないのねえ。それにわたくし、本氣で卑劣だの利己主義だのと申したのではないんですよ。

ナポオレオン。多分さうだらうと思つた。有難う。

貴婦人。ええ、さうですとも。わたくしの申しました意味はね、何んとなくあなたには思ひ切つて正直なところがあるといふことなの。

ナポオレオン。なほ結構です。

貴婦人。あなたは手紙を讀みたくなはない、けれど、その中に何が書いてあるかは知りたいたい。ですからあなたは獨りで葡萄園へお這入んなすつて。誰も見てゐない間に讀んでごらんなすつた。而して歸つて來て知らん顔をしてゐる。わたくしはこんな卑劣なまねをなさる

方に、會つた事はありません。ですけれど、それで以て、あなたの目的は立派に遂げられました。それであなはさういふ事をなさるのを、一向恐ろしいとも恥かしいとも思ひなさないのです。

ナポオレオン(面喰つて)。何處から一體、あなたはそんな下等な(賤やしむやうに力を入れて)。猜疑心を引出して來たのです、わたしはあなたを貴婦人——貴族であると考えへてゐたのだ。あなたの祖父さんは商人でしたらう、ねえ？

貴婦人。いいえ、イギリス人でございました。

ナポオレオン。それで分かつた。イギリス人といふ奴は商人根性の國民だ。それでわたしも何故、あなたに酷い目に合はされたか分つた。

貴婦人。まあ、わたくしはあなたをひどい目になんか、合はせは致しません。それにわたくしはイギリス人ではございませんよ。

ナポオレオン。いんや、あなたは——骨髓までイギリス人だ。お聴きなさい。わたしはイギリス人といふものを説明して上げよう。

貴婦人(乗出して)。どうぞ。(該博な卓説の聞かれる事と期待

して寝椅子の上に坐り直す。聴客がちやんとできたので、辯士も忽ち元氣づく。ナポオレオンは初めまづ熟考して徐ろに想を練る。彼の演説振は、初の中はコルネイユの悲劇「シンナ」に於ける、名優タルマの型に則つたものであつたが、闇に紛れていつかただのナポオレオンになり、薄暗い中から力強い聲だけが洩れて来る。

ナポオレオン。抑も世界には三種の民がある、下流の民、中流の民及び上流の民である。下流の民と上流の民とは一事に於いて相等しいものである。即ち彼等には疑惑がない、道德がないといふ事である。下流は道德の下に沈淪し、上流は道德の上に超越してゐるのだ。わたしはこの何れをも畏れん。何故といふに、下流の民

は物ものを知らんから惑まどはぬ、即すなはち相率あひまゐてわたしを偶像ぐうざう化する。之これと共に上流じやうりゆうの民たみは、目的もくてきがないから惑まどはぬ。即すなはち彼等かれらもまた、わたしの意志いしの前に屈服くつぷくする。よろしいか。かやうにして私わたしは全ぜんヨオロッパの衆庶しゆうじよをも、全ぜんヨオロッパの宮廷きやうていをも共に併あはせて、猶鋤なほすきを土つちに加くはふる如ごとく一令れいの下もとに屈從くつじゆうさせるのである。たゞ危険きけんなのは中流ちゆうりゆうの國民こくみんである。彼等かれらは知識ちしきをも目的もくてきをも持つて居をるのである。ただ彼等かれらもまた弱點じやくてんなきにしもあらずだ。即すなはち彼等かれらは渾身こんしん疑惑ぎわくに包つまれてゐる——手ても足あしもすべて自分じぶんで作つくつた道義だうぎと、責任せきにんの枷かせに繋つながれてゐる。

貴婦人きふじん。ではあなたはイギリス人じんをひどい目めにあはしっておやんなさい。何故なぜつて商人あきんどはみんな中流ちゆうりゆうの民たみですから。

ナポオレオン。いや、それはイギリス人じんは別べつな種族しゆぞくだからです。イギリス人じんといふ奴やつは疑惑ぎわくを持つ程ほど下等かとうでない、かといつて、その専制せんせいから超脱てうだつしうる程ほど高等かうとうでもない。併しかしイギリス人じんといふ奴やつには生れ乍なからにして或ある不可思議かしぎな力ちからがあつて、それが彼等かれらをして世界せかいの主人しゆじんたらしめるのである。彼等かれらは或ある物が欲ほしいと思おもつても決して欲ほしいとは言いはん、じつと辛抱しんぼうして待まつてゐる

と、何故だか知らんが彼等の胸中に、その欲する物の所有主を征服するのが自分の道徳上はた、宗教上の義務であるといふ、灸くが如き確信が生じて来る。さうなると彼等はもう手がつけられない。彼等は貴族の如く己れの好む事を爲る。欲しい物を捉む。商人と同様、強い宗教的な確信と、深い道義的義務の觀念より来る勤勉力行を以て、その目的を追求する。彼は未だ嘗て立派な道義的態度に於いて失敗した事はない。自由、而して國民的獨立の大選手として、彼は世界の半を併呑し、これを植民と稱してゐる。彼はその粗惡なマン

チエスタ―製造品の爲め新市場を得んとすれば、まづ宣教師を派遣して土人に平和の福音を傳へる。土人はその宣教師を殺害する。彼は忽ち基督教の爲めに干戈を執つて立つ。これが爲めに戦闘する。これが爲に征伐する。而して報酬として上天より市場を獲る。其本土の島の海岸防備に於て、彼は船毎に一人の牧師を載せ、十字架を付けた國旗を檣の天邊に打付けてをく、而して地球の果から果へ、凡そ自分と海上の帝國を争ふものは片端から或は沈め、或は焼き、或は破壊して了ふ。彼誇つて曰く、奴隸たる者、一度ブリテン國の

土に足を觸るゝ、刹那、長く自由の身たらんと。しかも
 彼はその國の貧民の兒童が六歳にしかならぬものを賣
 つて一日十六時間、工場に於いて鞭の下に労働させる
 のである。彼は既に二度も革命を行つてゐながら、吾
 吾の革命に對しては、法律と秩序の名に於いて宣戦を
 布告するのである。悪い事も善い事でもイギリス人の
 やらないといふ事はない。併し乍らイギリス人が非理
 であつたといふ例は、嘗てないのである。彼は萬事、
 主義に従つて行ふ。彼は愛國主義に従つて戦闘する。
 實業主義に従つて掠奪する。帝國主義に従つて奴隷を

作る。武俠主義に従つて暴行する。勤王主義に従つて
 王の味方をする。而して共和主義に従つて王の首をも
 斷つのである。彼の警語はいつも義務だ。然も彼は自
 分の利益に反對して、その義務を行はんとする國民の、
 必らず失敗すべきを決して忘れないのである。彼は――
 貴婦人。まあ、まあ、まあ、ちよ、ちよ、一寸待つて
 下さいよ。どうしてそんなに委しくイギリス人の話を
 しておきかせなさるんですの？
 ナポオレオン(修辭的の口調を止めて)。分かり切つたこと
 です。あなたは、わたしの所有に屬する手紙に目をつけ